





[宮澄マシロ]

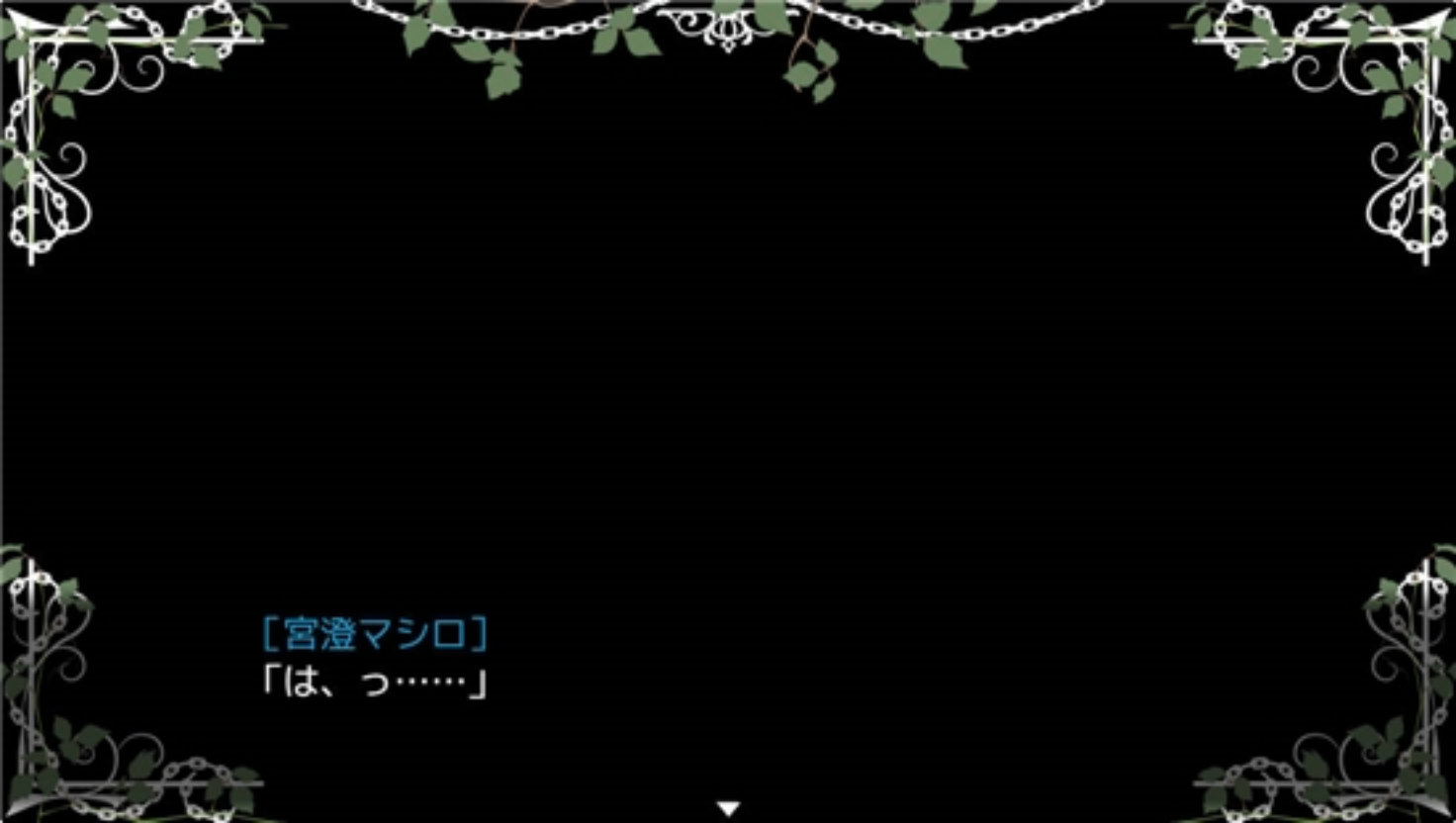
「や、あ……あ、だ、め……」







[黄櫨サンゴ]
「ダメに見えねーけど？」



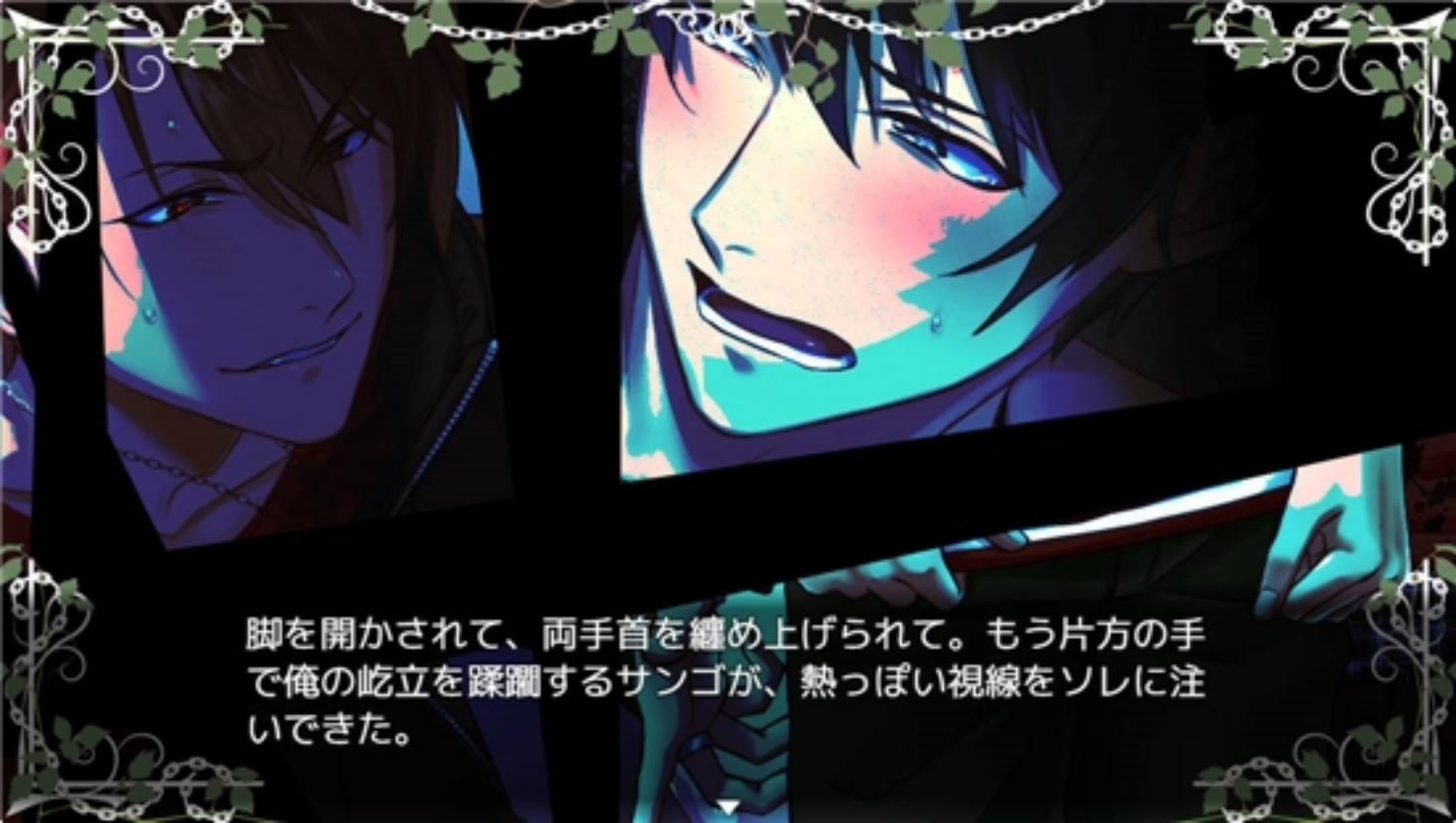


[宮澄マシロ]
「は、っ……」





なんで、どうして。どうして、こんなことに。



脚を開かされて、両手首を纏め上げられて。もう片方の手で俺の屹立を蹂躞するサンゴが、熱っぽい視線をソレに注いできた。



【黄橡サンゴ】


「は……すっげ、射精もまだなのに、ここベタベタ」





[宮澄マシロ]
「ひゃ、う！」





擦り立てられていた動きから一転、先端から先走りを掬い上げたサンゴが、うっとりと目を細める。




[宮澄マシロ]
「ア」

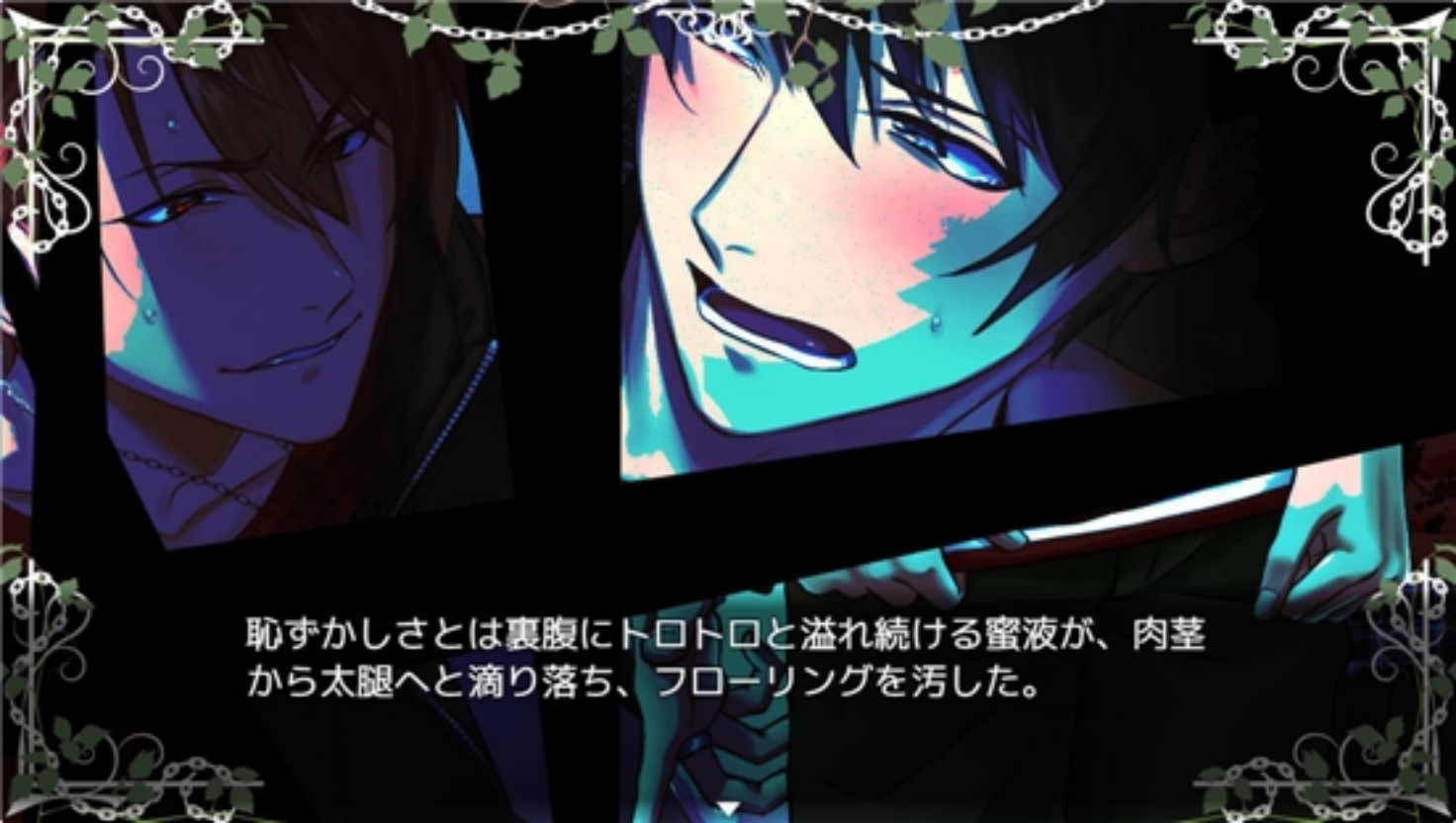


[宮澄マシロ]

(そ、か……サンゴはコレも……すきなんだ)



ハイグロフィリア……分泌物性愛。分泌液が好きだと聞かされたサンゴの言葉を、身体で思い知る。



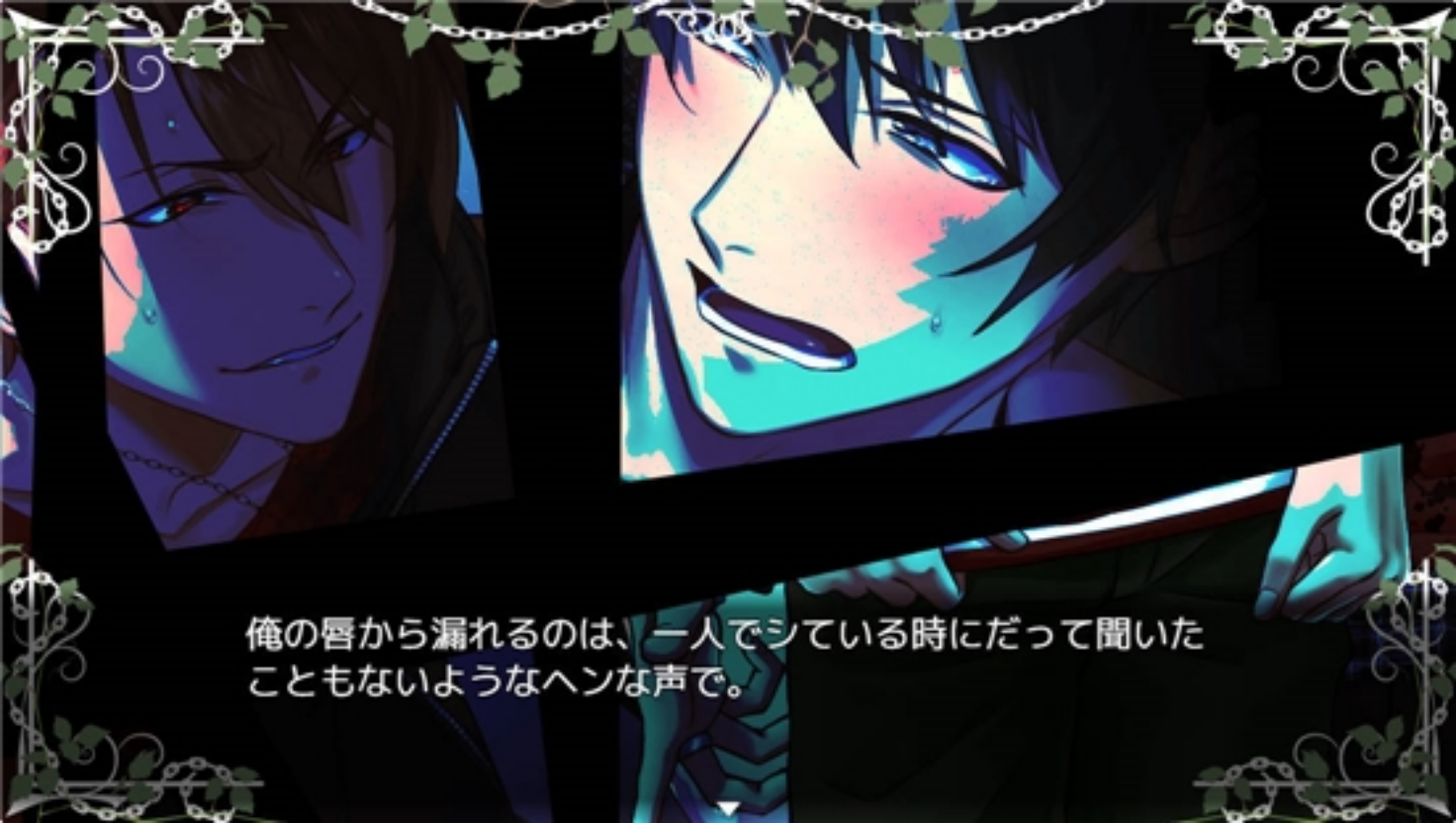
恥ずかしさとは裏腹にトロトロと溢れ続ける蜜液が、肉茎から太腿へと滴り落ち、フローリングを汚した。




【宮澄マシロ】

(ダメ、ってちゃんと、いわなきゃ……でも、なのに、おれ、なんで……っ)






俺の唇から漏れるのは、一人でしている時にだって聞いた
こともないようなヘンな声で。

An anime-style illustration of two characters in a dark room. The character on the left has long, dark hair and a serious expression. The character on the right has short, dark hair and a wide, toothy grin, holding a sword. The scene is framed by a decorative vine border.

暗い部屋で、眼前ではアダルトビデオが映し出されている。

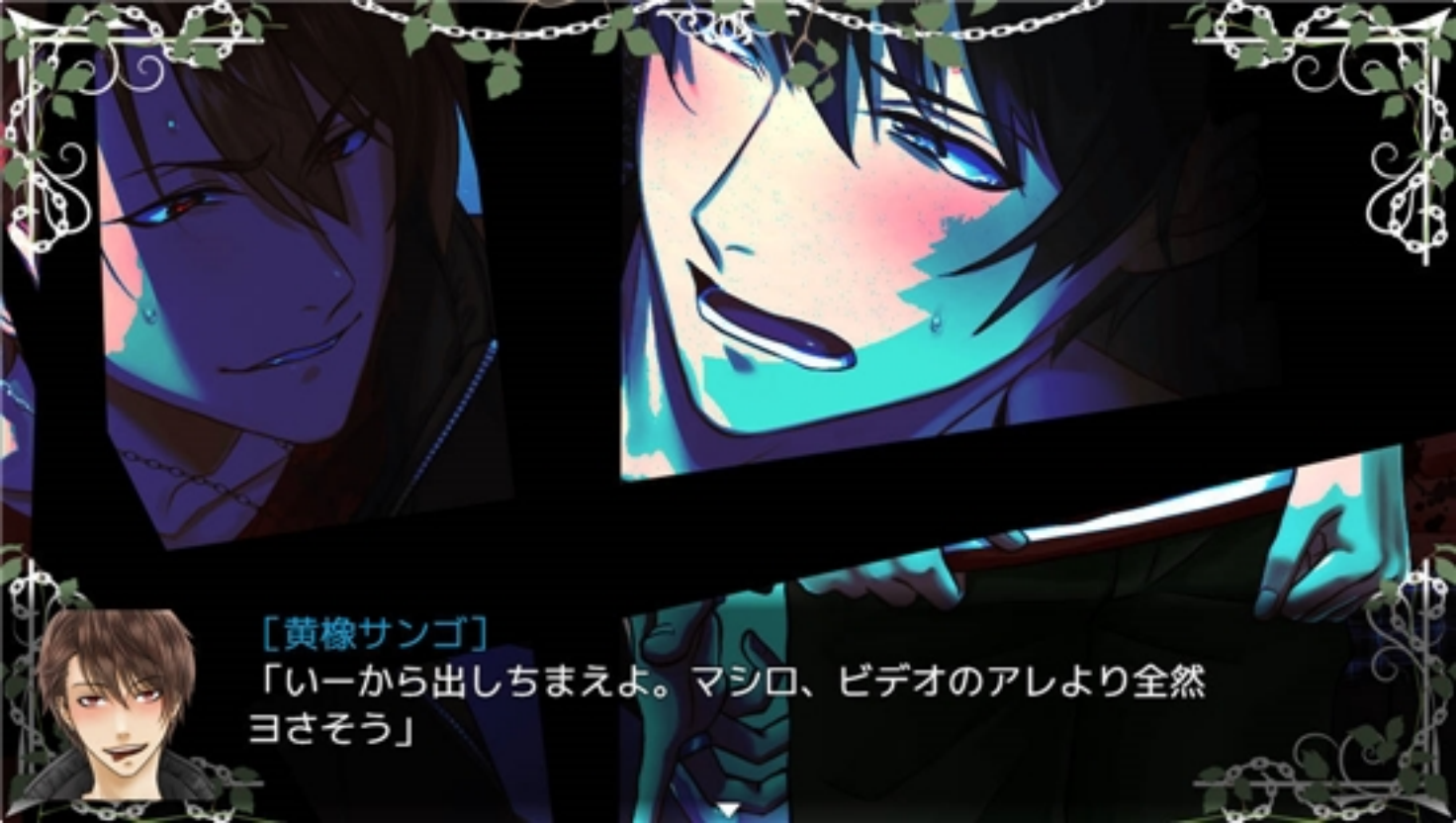


同じことをされているのだと実感すれば、倒錯した快楽が
背筋を駆け巡った。



[宮澄マシロ]

「はっ、ア……ら、め、でちゃう、っ……」



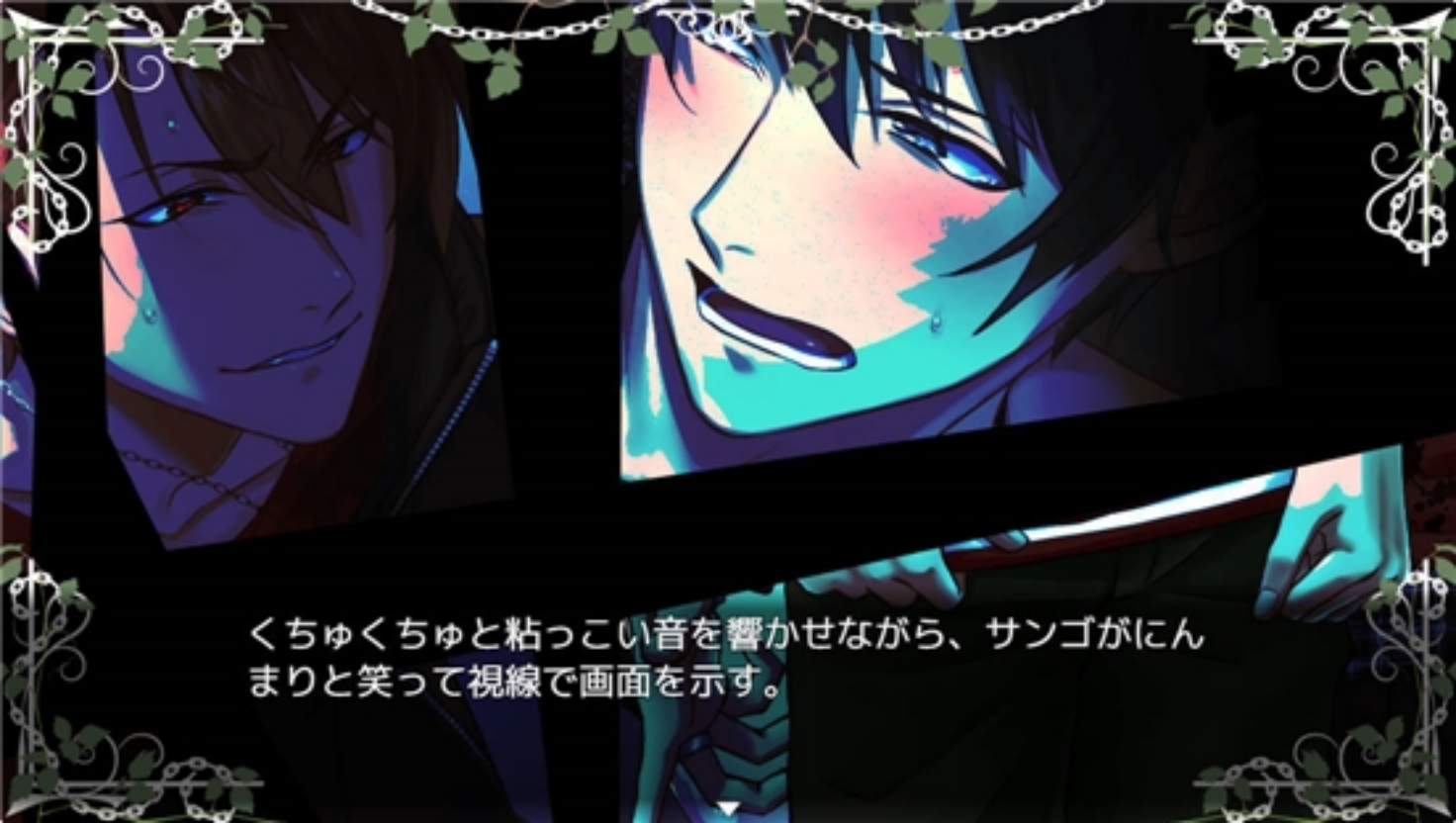
【黄橡サンゴ】

「いーから出しちまえよ。マシロ、ビデオのアレより全然ヨさそう」







[宮澄マシロ]
「ふ、あ！」



くちゅくちゅと粘っこい音を響かせながら、サンゴがにんまりと笑って視線で画面を示す。




初めての視覚への刺激と、初めて他人から与えられる刺激。




混乱、快感、倒錯感。何もかもが強烈で、拒む力をとうとう失った俺は……。



[宮澄マシロ]
「ン、ア、あっ、あ！！」



窮屈そうに膨れ上がった下着の中、サンゴの手の内側。



びくんと腰が大きく跳ね上がるのと同様、堪え切れずに熱い精液が吐き出されるのを感じた。

—少し前—





[黄橡サンゴ]

「ワリ、仕事がまだ終わらねーんだ」






[宮澄マシロ]

「お、俺こそ急に連絡して……う、わ」



A top-down view of a room layout. The room is rectangular with a door on the right side. Inside, there are several desks with computers, a central desk with a monitor, a sofa, and bookshelves. A character is visible in the center of the room. The room is surrounded by a dark background with decorative white and green vine patterns in the corners.

裏口の扉が開かれた先、眼前の光景に目を瞠る。



[宮澄マシロ]
「す、ごい量だな」



薄暗くて小さな部屋は、異様な量のDVDが混然と積まれていた。



【黄橡サンゴ】

「あと数本だけ新作DVDを確認したらオシマイ。ワリか
ったな、フィリアに行きたいって連絡くれたのに」



[宮澄マシロ]

「ん、大丈夫。待たせて貰うから」




【黄橡サンゴ】

「アリガト。チェック済み店内に置いてくっから、適当に座っとけよ」





[宮澄マシロ]
「ん」



素直に頷き続ける俺ににいと笑みを向けたサンゴが、悪いなと言って奥の扉へと消えた。




[宮澄マシロ]

(新作チェック……ビデオ屋の店長ってそんなことまでするの?)



腰を下ろしたすぐ傍の、新作ラベルが貼られたDVDを何となく眺めてみる。






けれどその表面には見慣れぬ単語が描かれていて、小首を
傾げてしまった。



[宮澄マシロ]
「濃厚汁だく？ ぐしょ濡れ？」



言葉の意味がわからず、ひょいと手に取ってみる。



くるとパッケージを裏返せば、びっしりと印刷された裸の画像にぎょっとしてしまった。





[宮澄マシロ]
「え!？」






[黄橡サンゴ]


「あーワリ、そのへん全部アダルト」



[宮澄マシロ]
「うわあああ！！？」



急に声をかけられたことで肩が跳ね、妙な声を上げてしま
う。



怯えるようにサンゴを見上げた俺に、もう一度謝罪したサンゴが腰を下ろした。



【黄橡サンゴ】

「オレんところ、別にアダルト専門じゃねーぞ。でも、今日の仕分けはコレ」



[宮澄マシロ]

「っ、ご、ごめん……ちょ、ちょっとびっくりした」



【黄橡サンゴ】

「なんだよマシロ、見るの初めてみたいいな反応だったぜ」



[宮澄マシロ]
「……う」





[黄橡サンゴ]

「は？ まさかマシロ……」



[宮澄マシロ]
「……」





[黄橡サンゴ]
「……マジかよ」






【宮澄マシロ】

「だ、だって見てハマるのが怖かったんだ。こういうのに
依存したら、ヘンになりそうで」



口早に言い訳を並べ立てた俺は、言い過ぎた拙さに恥ずかしくなって押し黙る。



俺の態度で本気だと察したのだろう。そっかそっかと一笑し、ノートをぺらりと捲りながら言葉を投げてきた。



【黄橡サンゴ】

「オナニーする時に相当見てんだと思ってた。そーゆーモンでもないんだ」



[宮澄マシロ]

「ほ、かの人はわからないけど……俺は」



[黄橡サンゴ]
「ふーん」






[宮澄マシロ]
「……」





話を逸らしたくて慌てて話題を探ろうと、きょろりと視線を泳がせた俺にノートが飛び込んで来た。



ジャンル、というやつ区分だろうか。汁の量だの射精の場所だの、あからさまな単語が詳細に纏められていた。



【黄橡サンゴ】

「コレ？ オレの店はこーゆー細かい区分してんのが売り」



[宮澄マシロ]
「売り？」



【黄橡サンゴ】

「そ、性癖が高じての区分だけど。これがけっこーウケて、
うまいこと売り上げに繋がってる」



サンゴが声をあげて笑ったあと手を伸ばし、あとはこれとこれ、とDVDを取り出しながら振り返った。




【黄橡サンゴ】

「二、三本ぐらいアダルト流すけど、平気？」




[宮澄マシロ]
「っ」

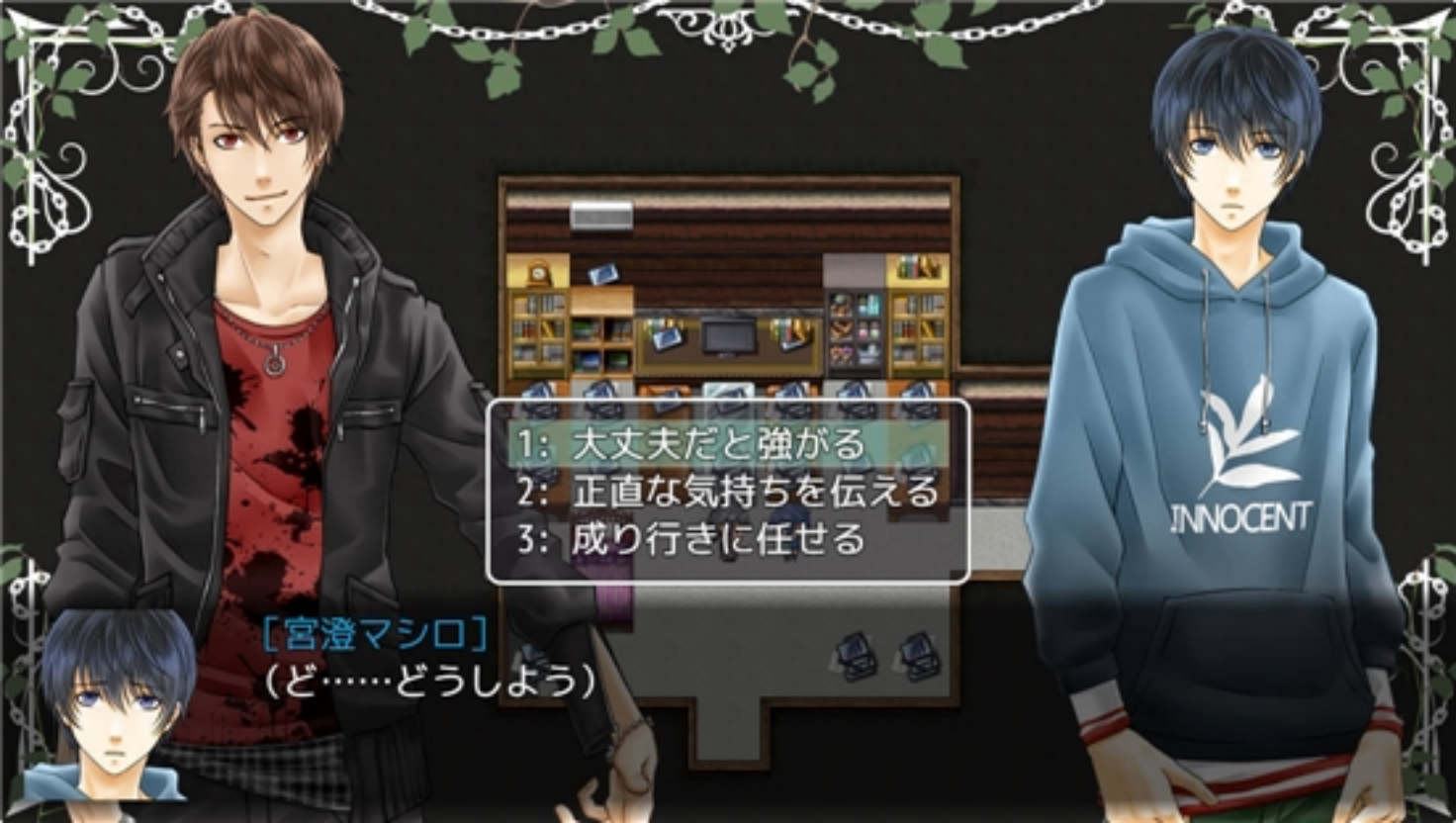




正直言うと、多分平気じゃない。



羞恥と抵抗感も勿論のこと、見たときの自分の反応がまったく読めなかった。

- 
- 1: 大丈夫だと強がる
 - 2: 正直な気持ちを伝える
 - 3: 成り行きに任せる

[宮澄マシロ]
(ど……どうしよう)



[宮澄マシロ]

(でも、待つって言ったのは俺だし……ダメだなんて言い辛いよな)



[黄橡サンゴ]
「マシロ？」



[宮澄マシロ]

「あ、ご、ごめん！ わ、わからないけど大丈夫！」



【黄橡サンゴ】

「わからないって、なんだそれ。ま、なら早速始めるぜ」




[宮澄マシロ]
「っ……うん」



INNOCENT



眼前のテレビにサングが選んだDVDが再生される。

The image features two anime-style male characters standing in a room. The character on the left has short brown hair and is wearing a black jacket over a red t-shirt with a dark pattern. The character on the right has short dark blue hair and is wearing a light blue hoodie with a white leaf logo and the word "INNOCENT" printed on it. In the background, there is a large wooden bookshelf filled with books and several blue book-shaped objects scattered on the floor. The scene is framed by a decorative white vine border.

真顔でコマ送りを続けていたサンゴだが、ふと裸体が映し出された場面で手を止め、等倍速で再生を始めた。



【黄橡サンゴ】

「へー、前半から結構ぶっかけてんだな」



[宮澄マシロ]

「え……なに、これ、なんで」



テレビの中の男性の頭上から、複数の男性が多量の白濁を
進らせる光景が映っている。



【黄橡サンゴ】

「男同士だからか？　ウチはなんでも置いてんだよ」



【宮澄マシロ】

「そ、れもだけど……なんで頭からかけてるんだ」



【黄橡サンゴ】

「そりゃ、オレみたいな性癖のヤツがコーフンする用？」



[宮澄マシロ]
「あ」



言われ、サンゴの性癖を改めて思い出す。



[宮澄マシロ]

(分泌物……だから精液も、なんだ)



そう思って画面を意識すれば、夥しい量の白濁が浴びせかけられるさまに疑問が上がる。



[宮澄マシロ]

「こ、っ、こんなに出るのか!？」



【黄橡サンゴ】

「これは本物だな。作り物が使われてる時もある」



[宮澄マシロ]
「っ……」



男優の身体中に纏わり付く白濁を見て、得も言われぬ感情
が燃ってしまう。



よくわからない、なんだこれ、それなのに、けれど。



【宮澄マシロ】

「サ……サンゴは、本物とかすぐわかるんだ」



ぼわりと紅潮する頬を手で隠し、慌てて気を逸らそうと話を振った。



[黄橡サンゴ]
「まーな」





[宮澄マシロ]

「そ、なんだ……すごいな」



【黄橡サンゴ】

「逆にわかんなければ、それはそれでスゲーって評価するかも」



[宮澄マシロ]
「そっ、か……」




何事もないと装い続けながらも、眼前の光景に惹き込まれる。



[宮澄マシロ]

(なんで……なんで。俺、なんで……どうして)



目の前で行われている行為の、何が面白いかなんてわからない。



けれどどろりと身体の上を這い回る白濁を見て、単純な関心が沸き上がってしまう。



[宮澄マシロ]

(あれだけ出せたら……どんな感じなんだろう)



そんな興味が、一度頭を擽げてしまえばもう手遅れで。




[宮澄マシロ]
(あ)



どうしよう。まずい。こんなところで。



膨らみかけた前を隠そうと、きゅうと上服を引っ張って誤魔化してみる。

The image features two anime-style male characters standing in a room. The character on the left has short brown hair and is wearing a black jacket over a red t-shirt with a dark pattern. The character on the right has short dark blue hair and is wearing a light blue hoodie with a white leaf logo and the word "INNOCENT" printed on it. In the background, there is a large wooden bookshelf filled with books and a table with several blue books scattered on it. The scene is framed by a decorative white vine border.

けれど余計に怪しまれたのか、小首を傾げたサンゴが俺を覗き込んだ。




[黄橡サンゴ]
「マシロ、どしたんだよ」



[宮澄マシロ]
「~~、っ……」

INNOCENT



一瞬だけきょとんとしたサンゴだが、俺の様子ですぐに見破ったのだろう。



にんまりと笑って顔を近付け、軽い調子で告げてきた。



[黄橡サンゴ]
「タッチャった？」





[宮澄マシロ]
「……」

INNOCENT



[黄橡サンゴ]

「へーえ、マシロは結構 Hentai なんだな」



[宮澄マシロ]
「ち、違う！」





【黄橡サンゴ】

「だってこーゆーことしたいとか、サしたいとか」



[宮澄マシロ]

「っ、そうじゃないんだ！」





顔を盛大に朱に染めた俺は、誤解されるよりはと本音を丸ごと吐き出した。



[宮澄マシロ]

「そ、うじゃなくて……あ、あれだけ出せたらキモチイイ
のか、って……」



【黄橡サンゴ】

「は？ ……あー、ナルホド？」



[宮澄マシロ]
「っ」





サンゴがにいと目を細め、前を隠す俺の手をぱっと掴んで持ち上げた。



[宮澄マシロ]
「わ！」





【黄橡サンゴ】

「シたいサレたい、じゃねーんだ。マシロはあくまで自分
単独なんだな」



[宮澄マシロ]
「う……」





[黄橡サンゴ]
「あれ、ハズレ？」



[宮澄マシロ]

「そ、っ……だと、おもう……」





[黄橡サンゴ]
「へーえ？」



まじまじと俺を眺めるサングの視線から逃れたいのに、両手を固定されていては叶わない。



戸惑う俺の様子を見て楽しそうに笑ったサンゴが、こともなげな調子で告げた。



[黄橡サンゴ]
「なら、やってみる？」



[宮澄マシロ]
「え!？」





【黄橡サンゴ】

「オレも興味あんだよね。目の前で見てみてーし」



[宮澄マシロ]

「だ、だって……それ、って俺の……！」



【黄橡サンゴ】

「マシロもオレも、お互いに興味が満たせるだろ」



[宮澄マシロ]
「な、っ……」






だめだ、そんなの。恥ずかしい、無理だって言わなくちゃ。




あまりの提案に言葉を無くしている間に、テレビの中の行為も白濁の量も苛烈さを増していく。



【宮澄マシロ】
「……っ」





[黄橡サンゴ]

「マシロ、ココすっげー苦しそう」

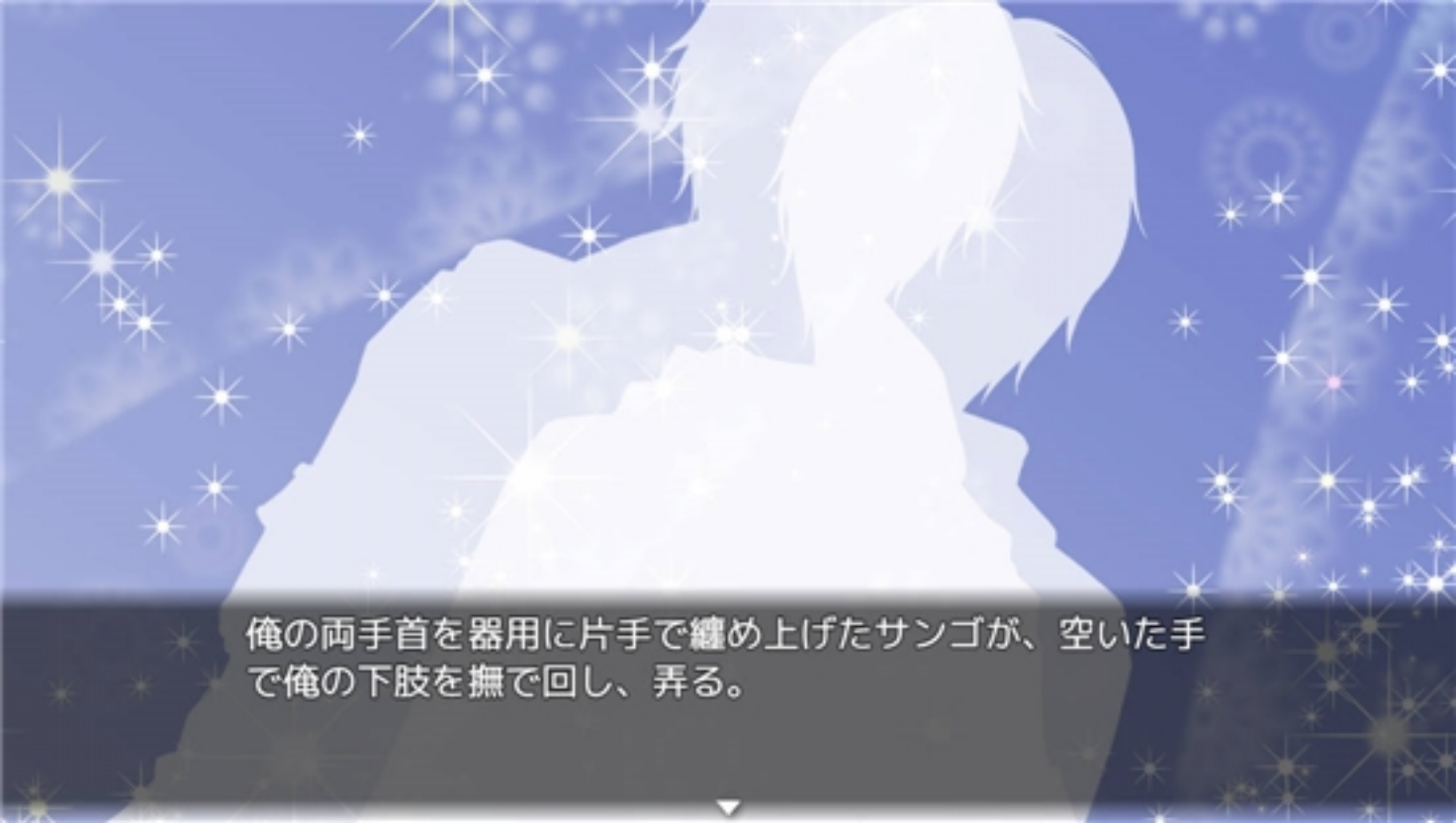




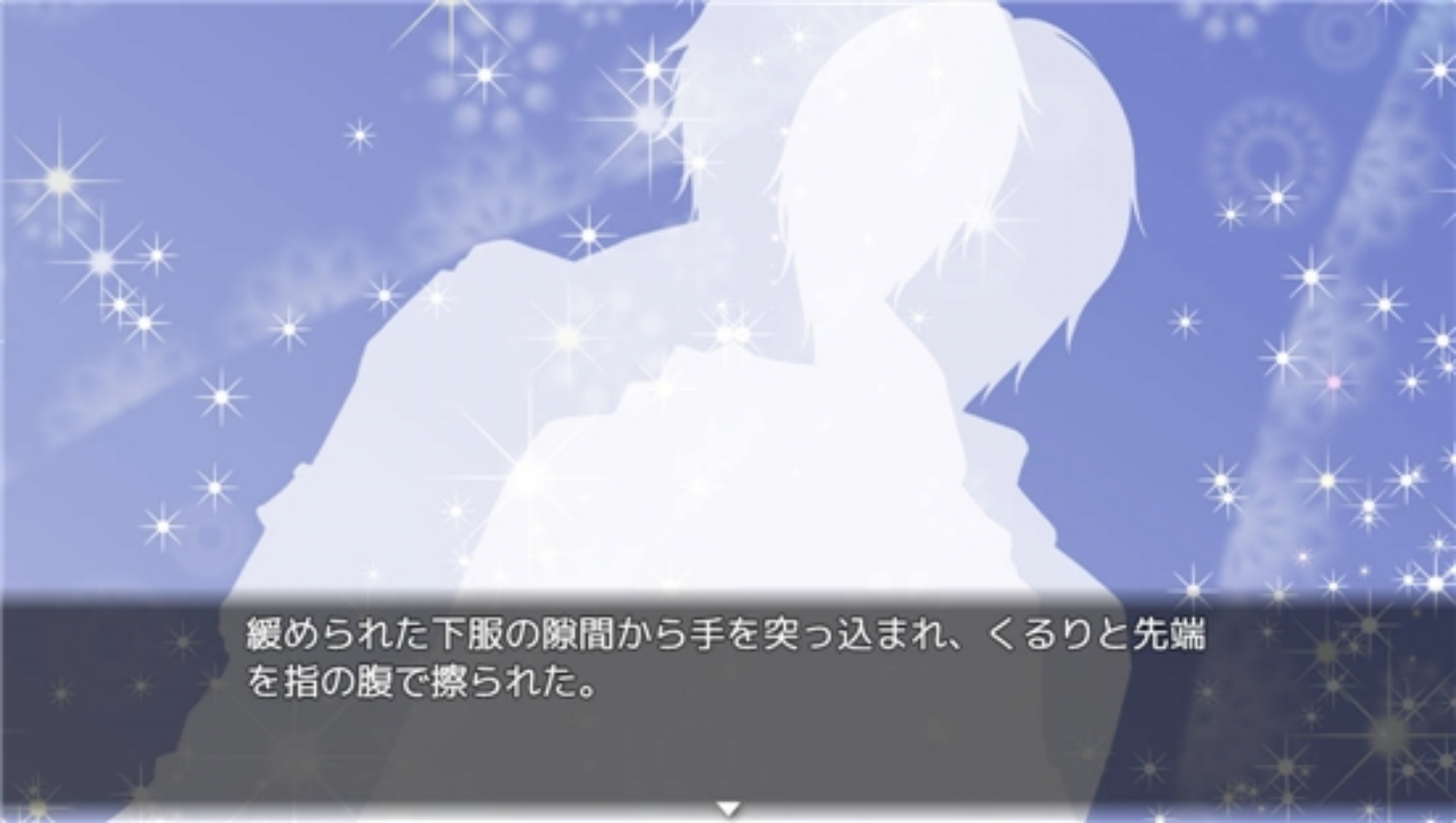
【宮澄マシロ】

「ん……あ……っ」






俺の両手首を器用に片手で纏め上げたサンゴが、空いた手で俺の下肢を撫で回し、弄る。

The image features a blue-toned illustration of a couple embracing. The man is on the left, leaning towards the woman on the right. The scene is filled with numerous white, starburst-like sparkles of varying sizes, creating a dreamy and romantic atmosphere. At the bottom of the image, there is a dark semi-transparent rectangular box containing white Japanese text. A small white downward-pointing triangle is centered at the very bottom edge of the image.


緩められた下服の隙間から手を突っ込まれ、くるりと先端を指の腹で擦られた。



【宮澄マシロ】

「っ……ン、さわるな、っ」






[黄橡サンゴ]

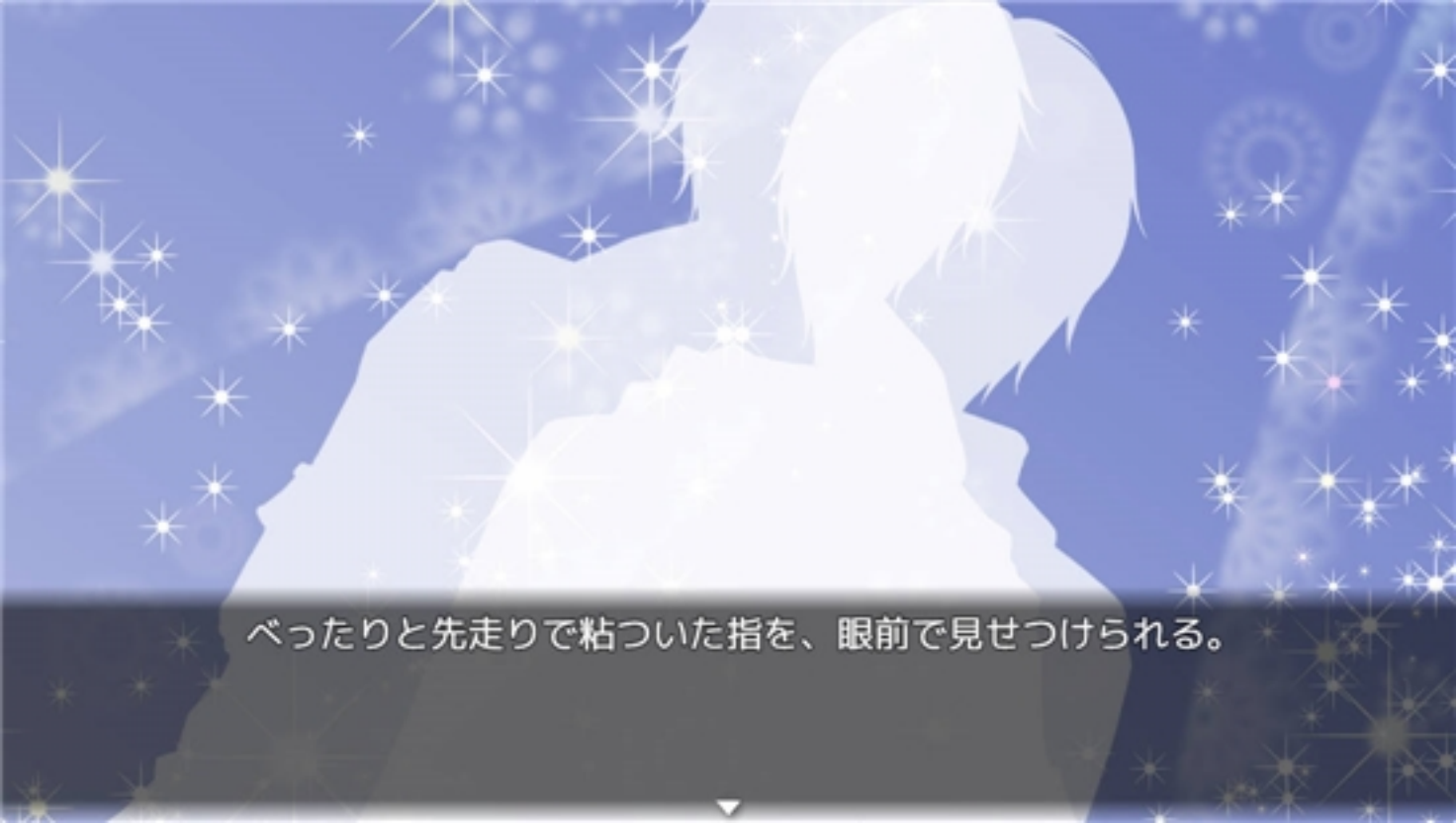
「全然説得力ねーの、ほら」






【宮澄マシロ】
「や」






べったりと先走りで粘ついた指を、眼前で見せつけられる。



[黄橡サンゴ]

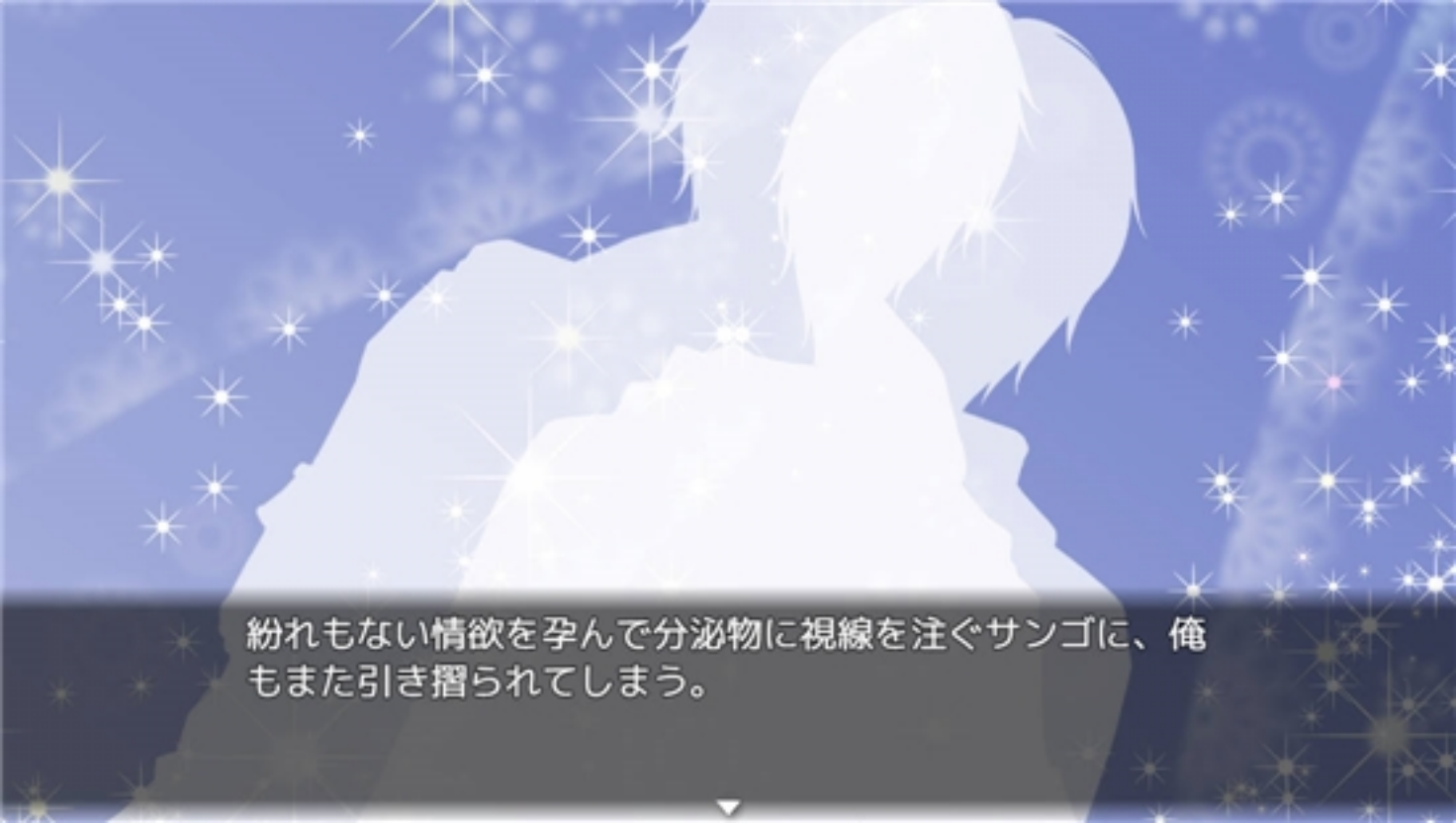
「いー感じ。ナマで見るのってこんなにグッとクんだな」



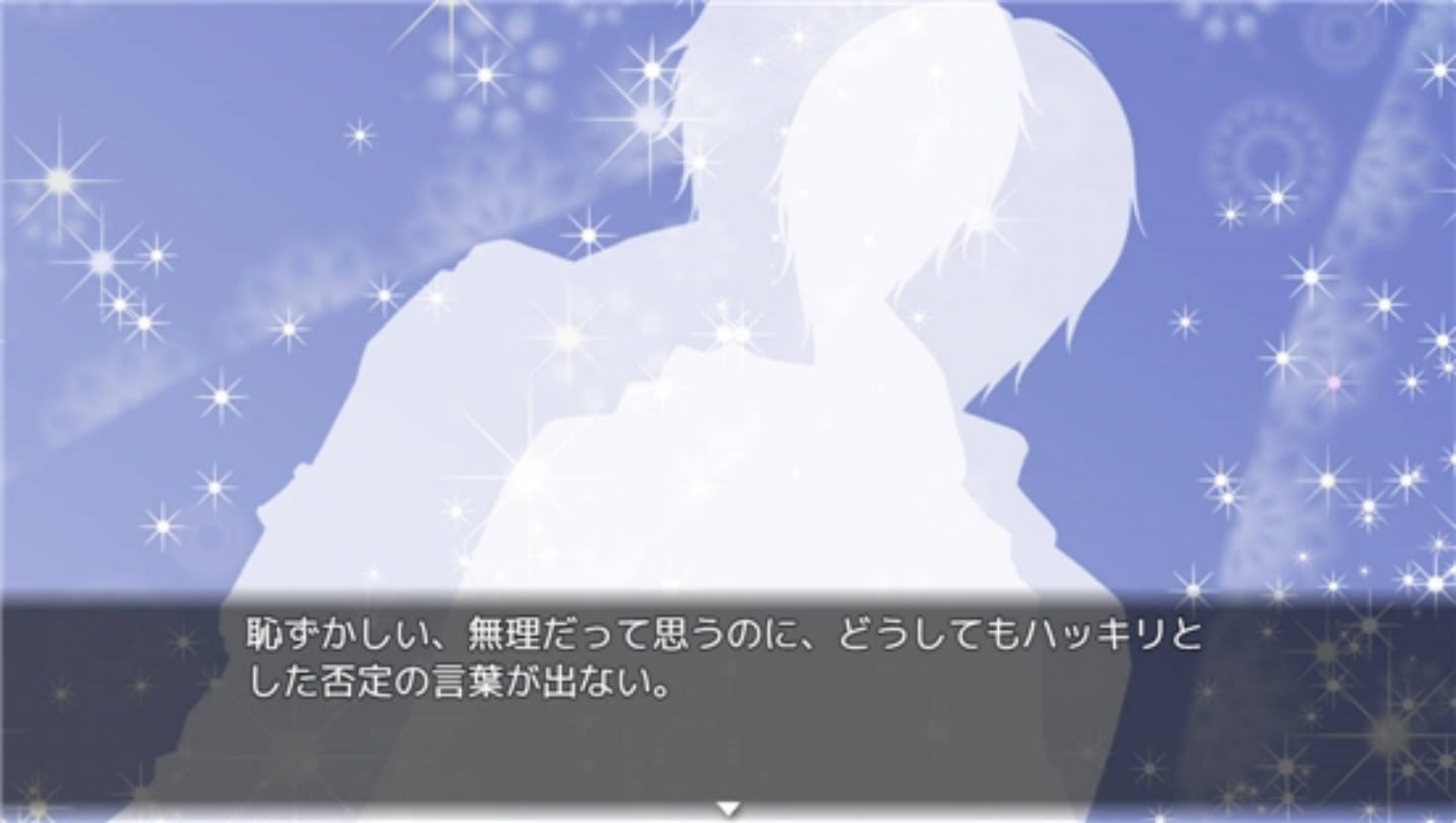


【宮澄マシロ】
「あ……」






紛れもない情欲を孕んで分泌物に視線を注ぐサングに、俺もまた引き摺られてしまう。




恥ずかしい、無理だって思うのに、どうしてもハッキリとした否定の言葉が出ない。



【宮澄マシロ】
「……」

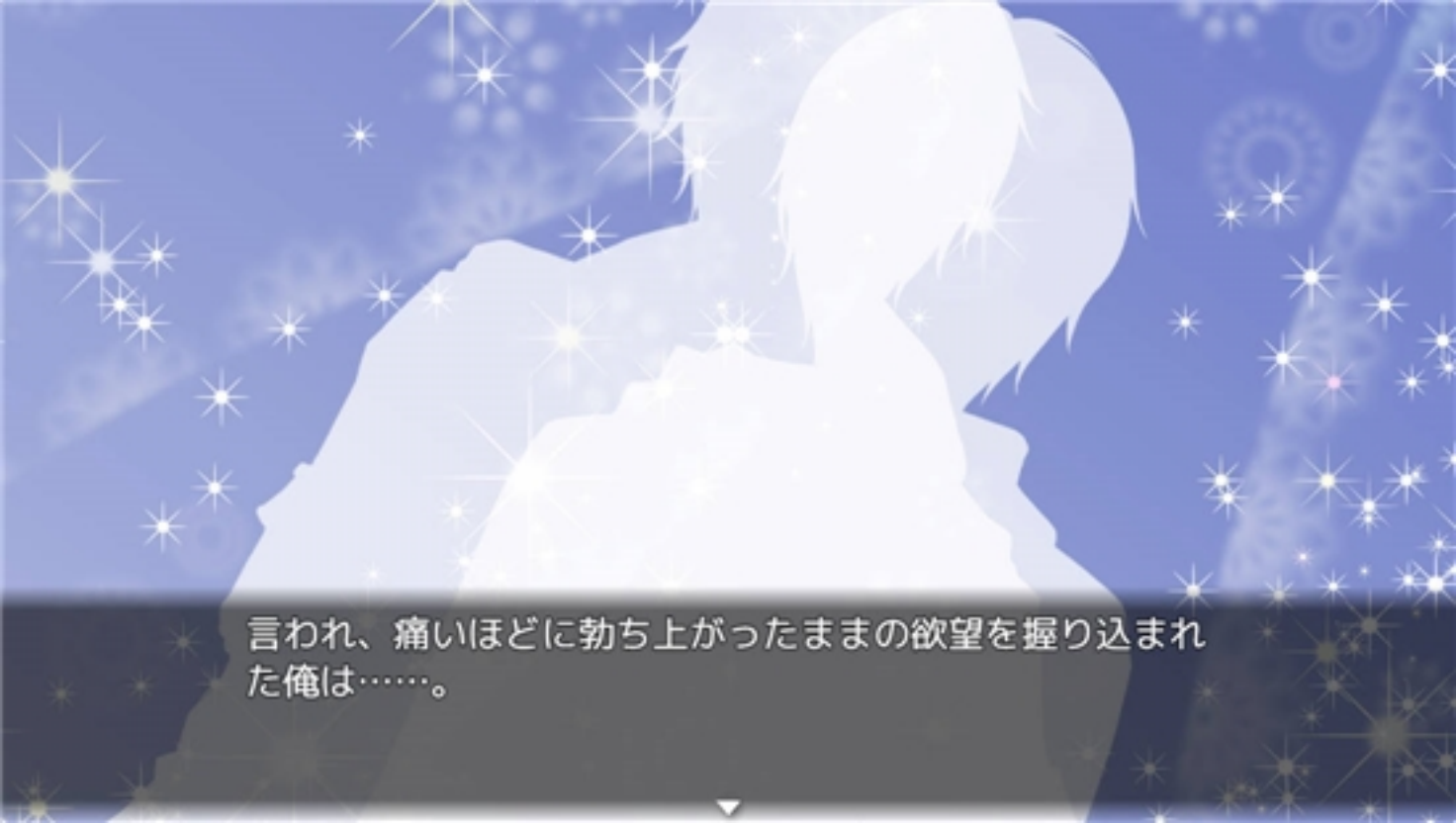




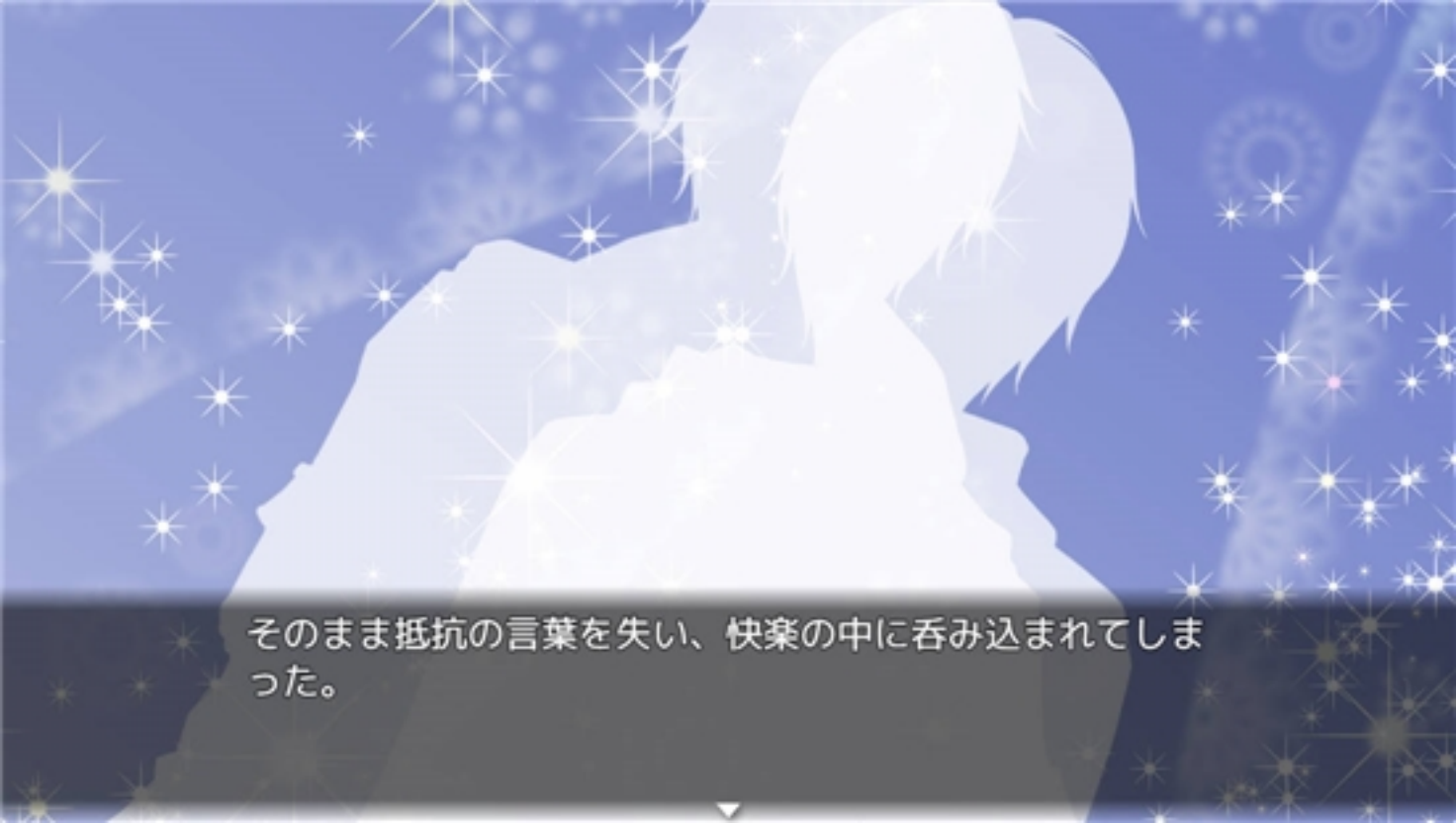
【黄橡サンゴ】

「な、マシロ。ビデオと同じぐらい出せたらどうなるか…
…試そーぜ」





言われ、痛いほどに勃ち上がったままの欲望を握り込まれた俺は……。

A blue-toned illustration of a couple embracing. The scene is filled with sparkling light effects, resembling stars or snowflakes, scattered across the background. The couple is rendered in a soft, glowing style, with the woman's hair and the man's profile visible. The overall mood is romantic and dreamlike.

そのまま抵抗の言葉を失い、快樂の中に呑み込まれてしまった。



ファイリアに集う
羊たちの

唄



[宮澄マシロ]

「っひ……う……！ あ……あ、あつ……！」



[黄橡サンゴ]


「は……すっげ。よんはつめ」



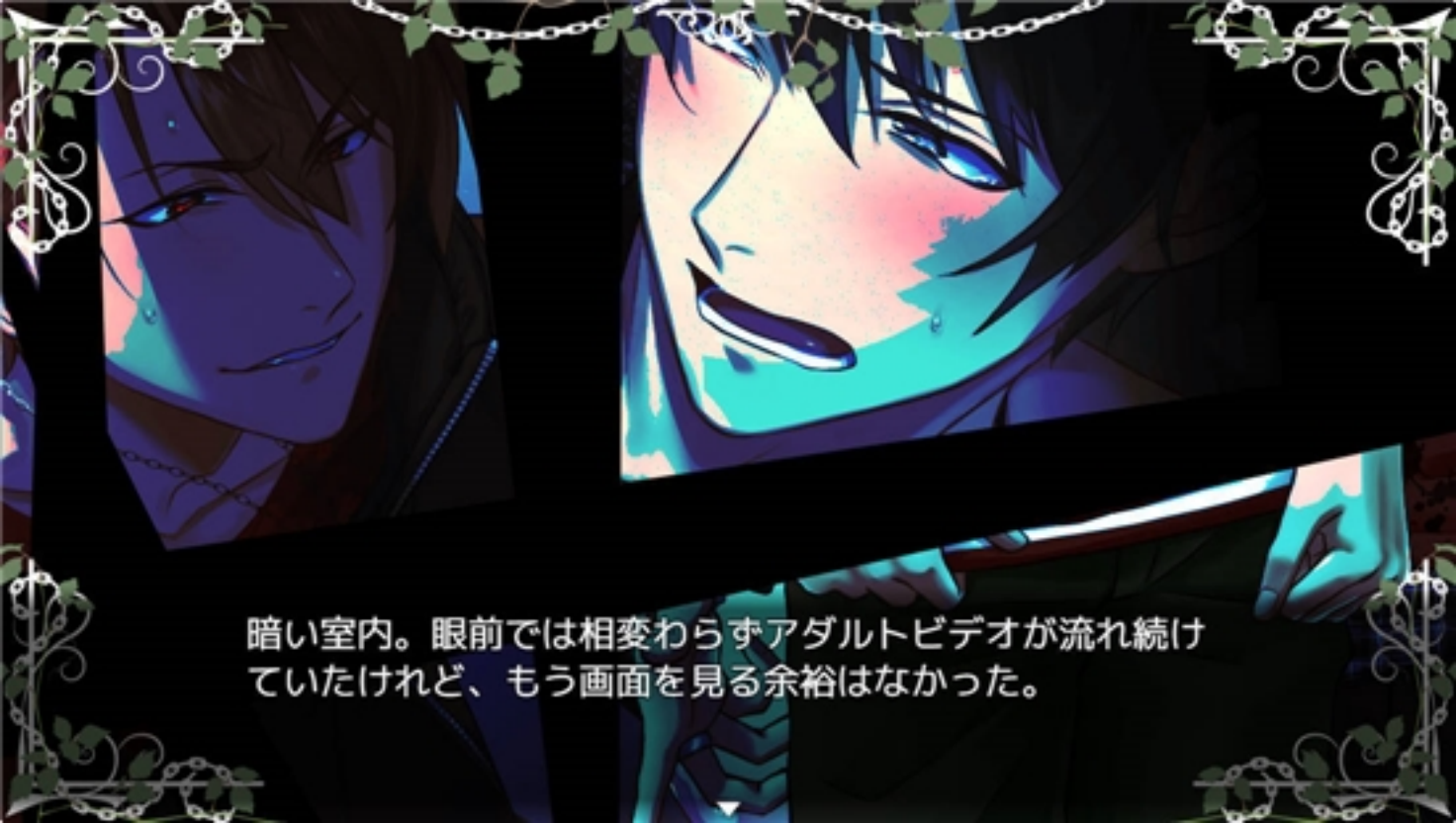


[宮澄マシロ]

「う……っ、も、やら……」



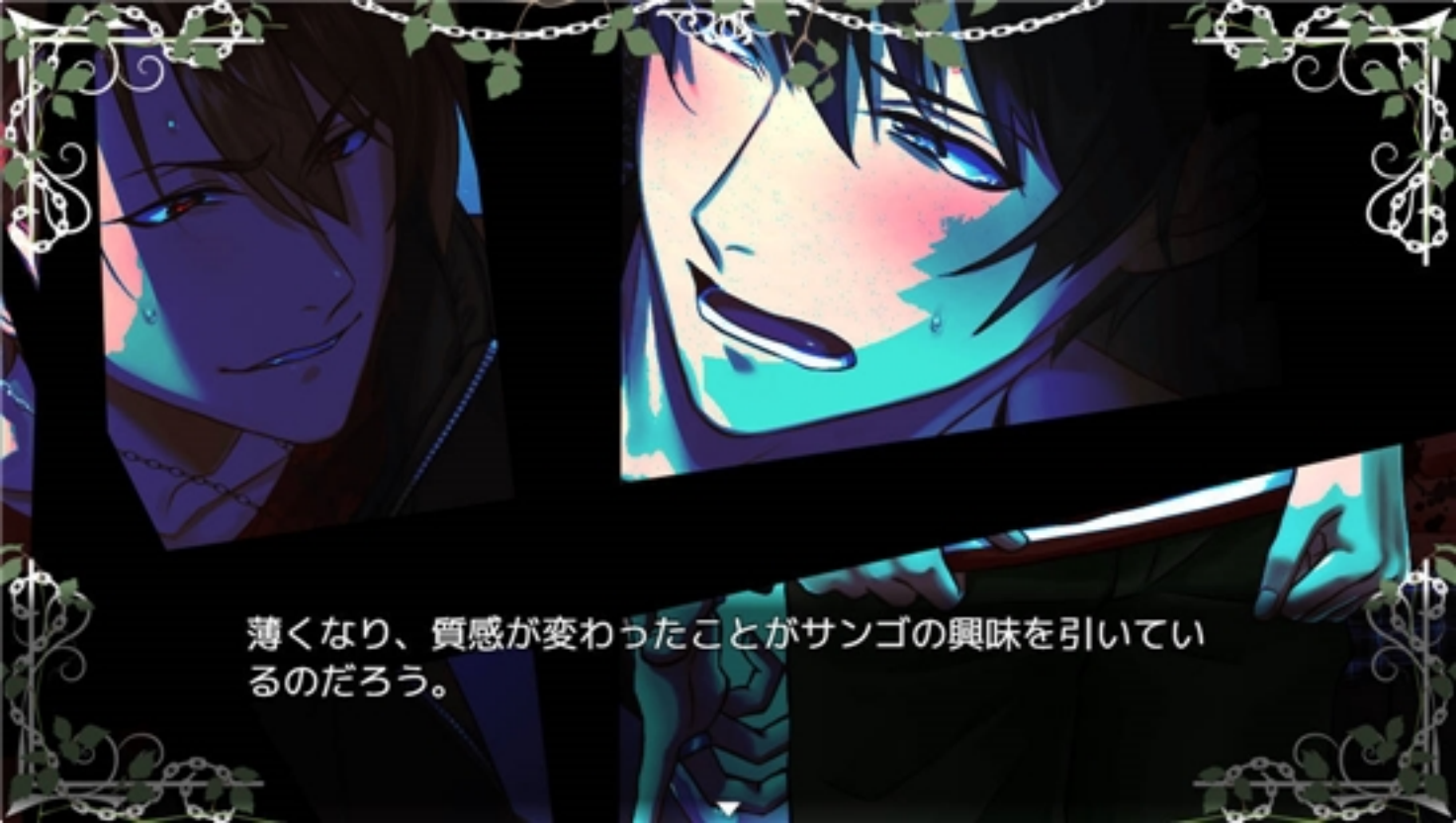
粘性を失った僅かな精が鈴口からびゆく、びゆくと零れる。




暗い室内。眼前では相変わらずアダルトビデオが流れ続けていたけれど、もう画面を見る余裕はなかった。



[黄橡サンゴ]
「へー……もううっすいの」



薄くなり、質感が変わったことがサンゴの興味を引いているのだろう。



うっとり目を細めながら白濁を指で掬ったサンゴが、追
い立てるように俺の先端に塗り付けた。



[宮澄マシロ]
「や」



【黄橡サンゴ】

「最初の濃いヤツと全然感触ちげーの。こんなに……なん
のか」





[宮澄マシロ]

「ひ、あ……や、びりびりする、さわるな……っ」



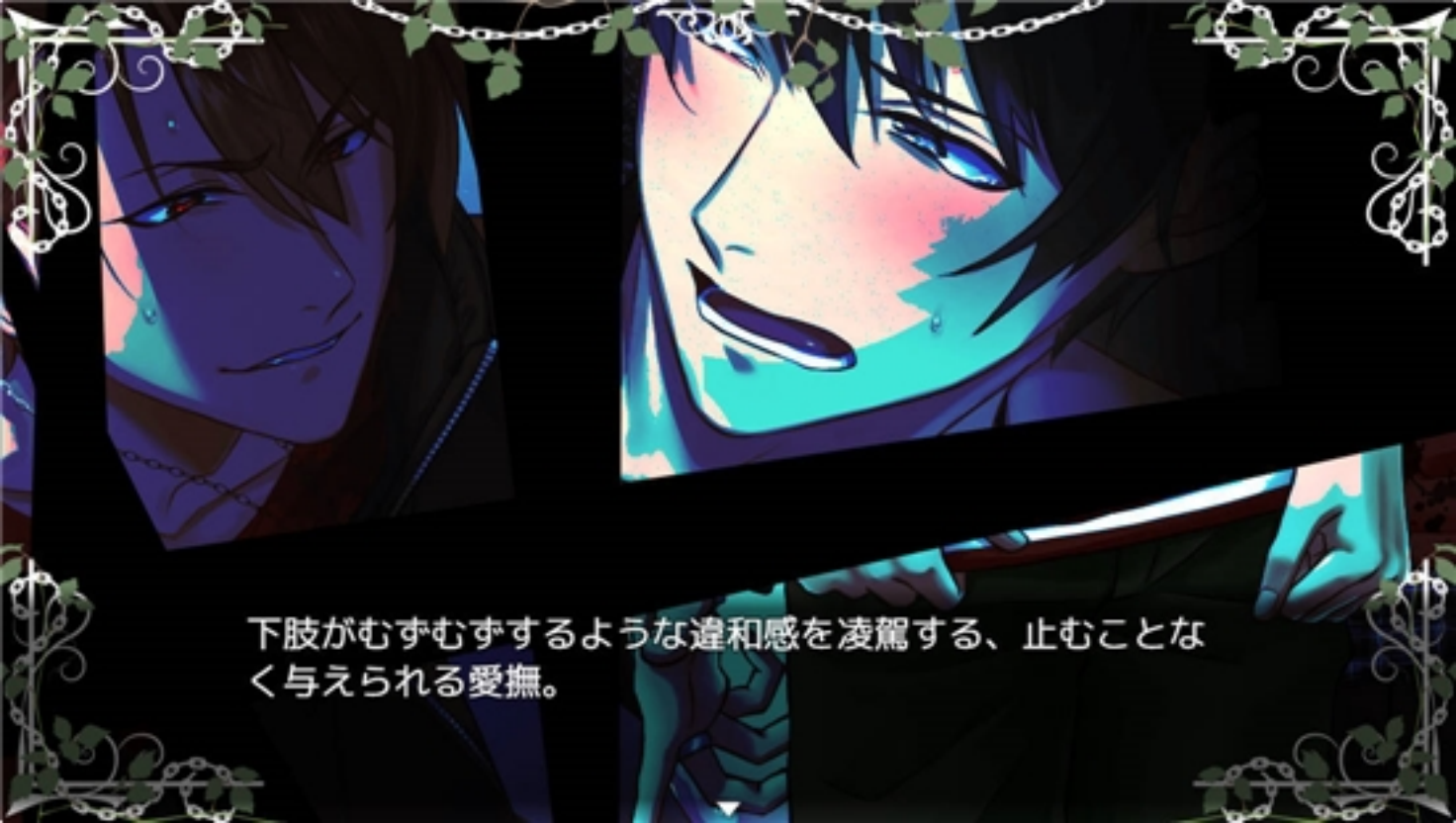


[黄橡サンゴ]
「は？ 痛いとか？」




[宮澄マシロ]

「あ……いたくは、ない、っ、けど……っ、あ、なんか……」



下肢がむずむずするような違和感を凌駕する、止むことなく与えられる愛撫。

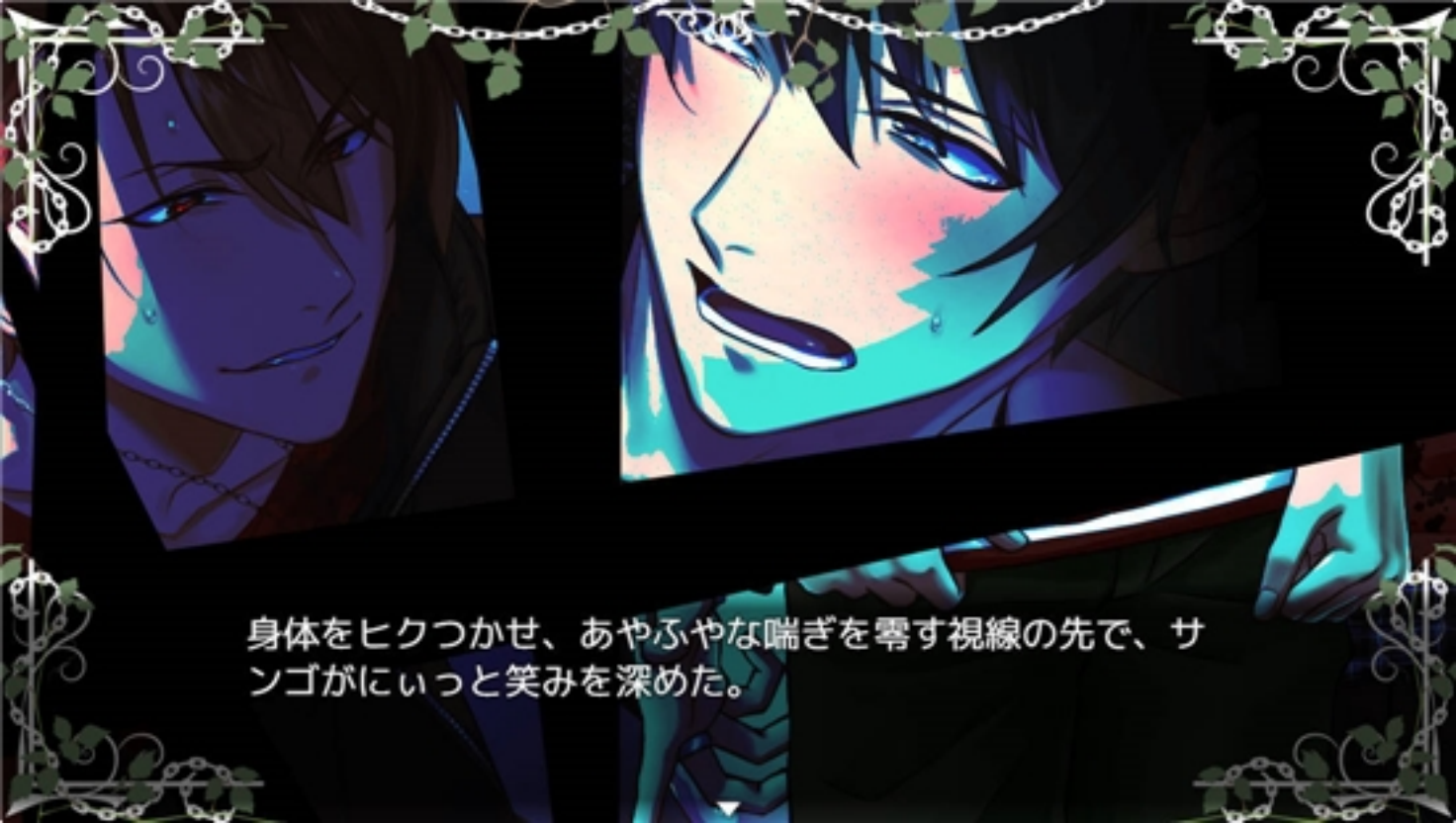


射精したばかりの先端を舐られ、鈴口から残りの分泌液を搾るように揉み込まれる。



[宮澄マシロ]

(あ……なんだこれ、ヘンだ……わからない、なんか……)



身体をヒクつかせ、あやふやな喘ぎを零す視線の先で、サ
ンゴがにいと笑みを深めた。



【黄橡サンゴ】

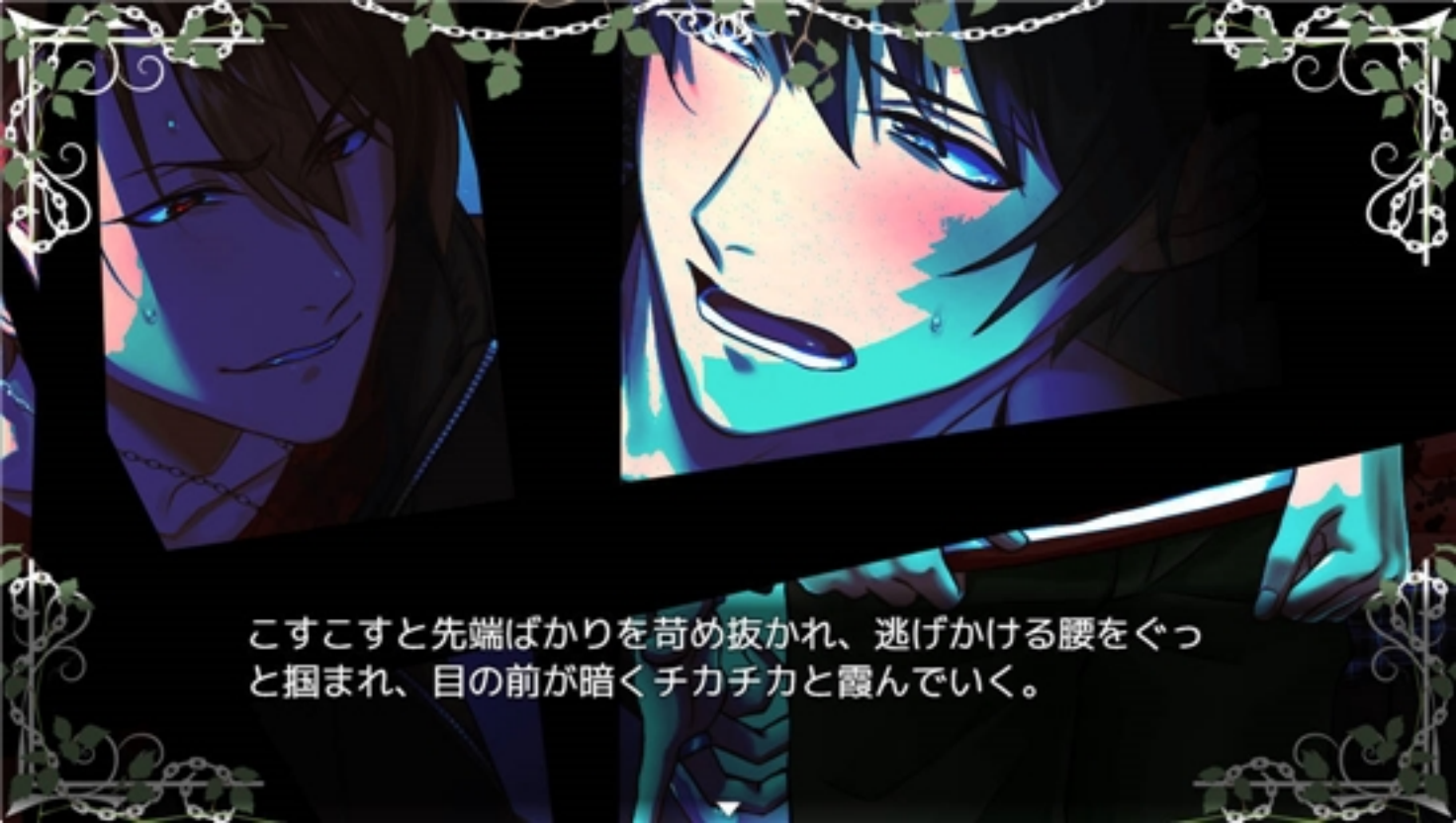
「痛くねーならもーちょい、ダしてみよーぜ」





[宮澄マシロ]

「あ、ああつ！ や、あ、はげし、っ……あ、やあ、あ、あ！」



こすこすと先端ばかりを苛め抜かれ、逃げかける腰をぐつと掴まれ、目の前が暗くチカチカと霞んでいく。



[宮澄マシロ]

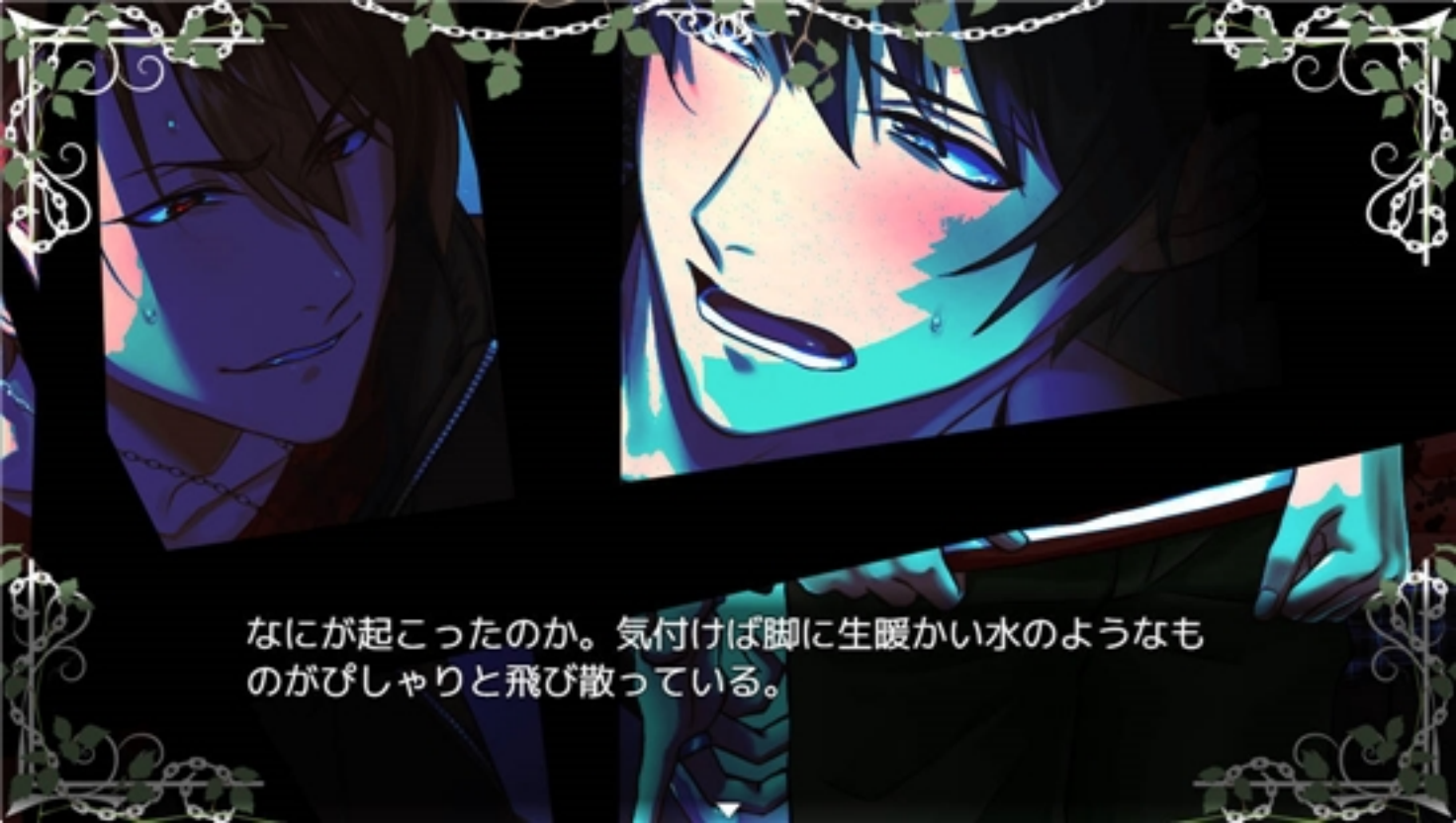
「ひ、あ、つ……あ、〜〜つ、う……あ、あ……！」






[黄橡サンゴ]
「!」





なにが起こったのか。気付けば脚に生暖かい水のようなものがぴしゃりと飛び散っている。



わからないままひぐひぐと嗚咽交じりに喘ぐ俺に、サンゴ
がほうと恍惚の息を吐いた。



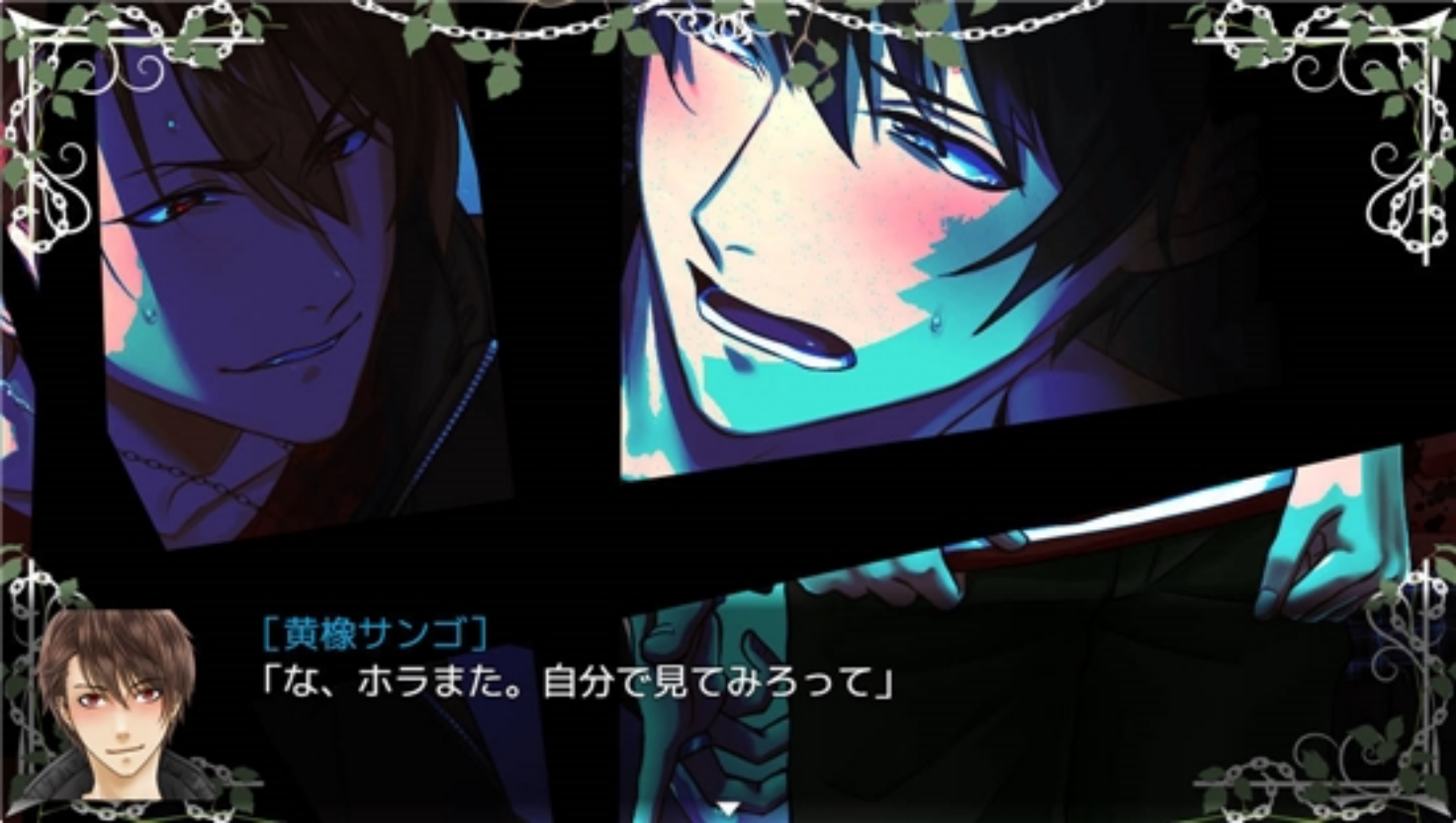
〔黄橡サンゴ〕

「すげマシロ、初めてなのに潮吹けるんだな」



[宮澄マシロ]

「し、おって……っひあ、ン!!!」



[黄橡サンゴ]

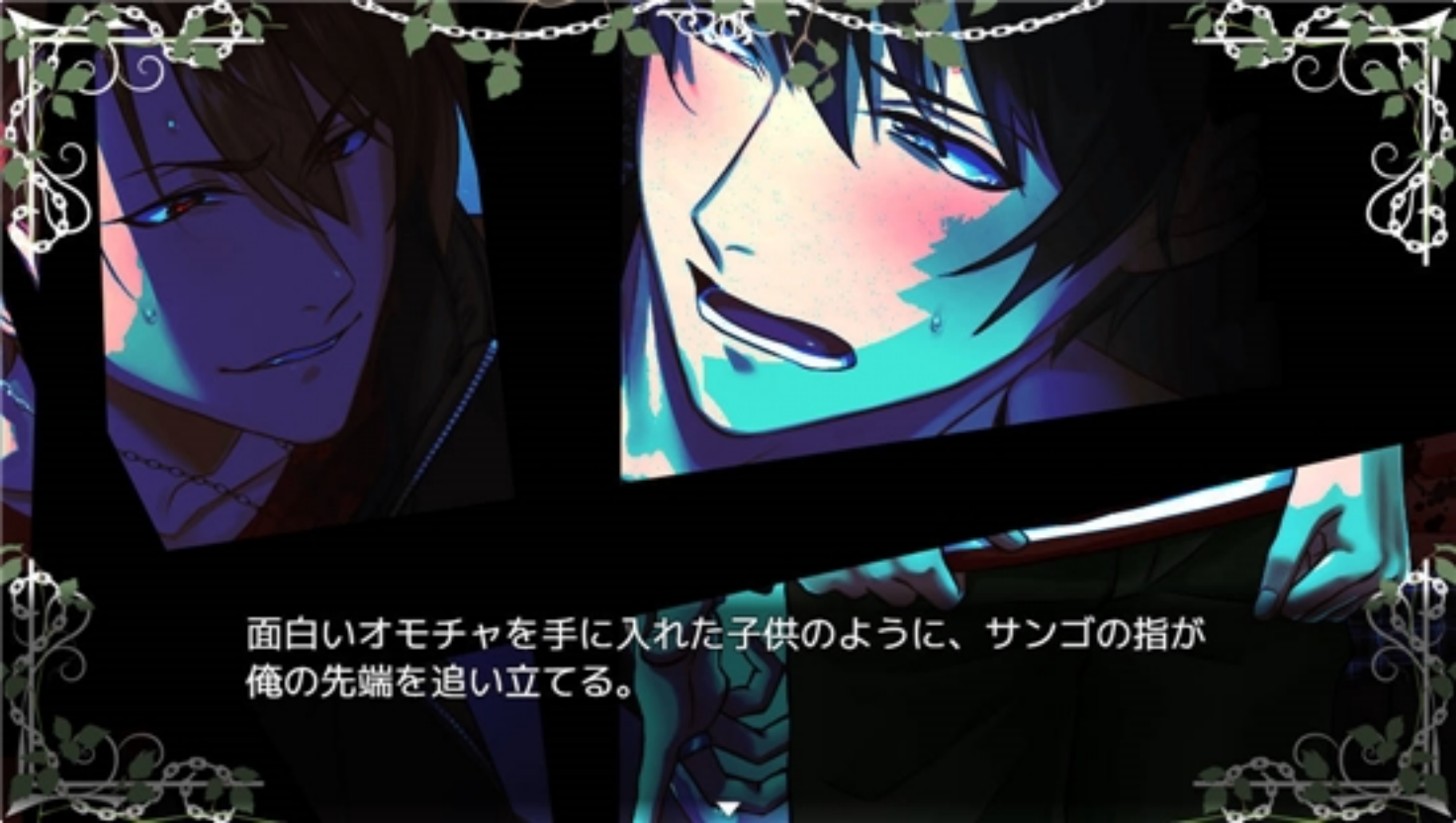
「な、ホラまた。自分で見てみろって」



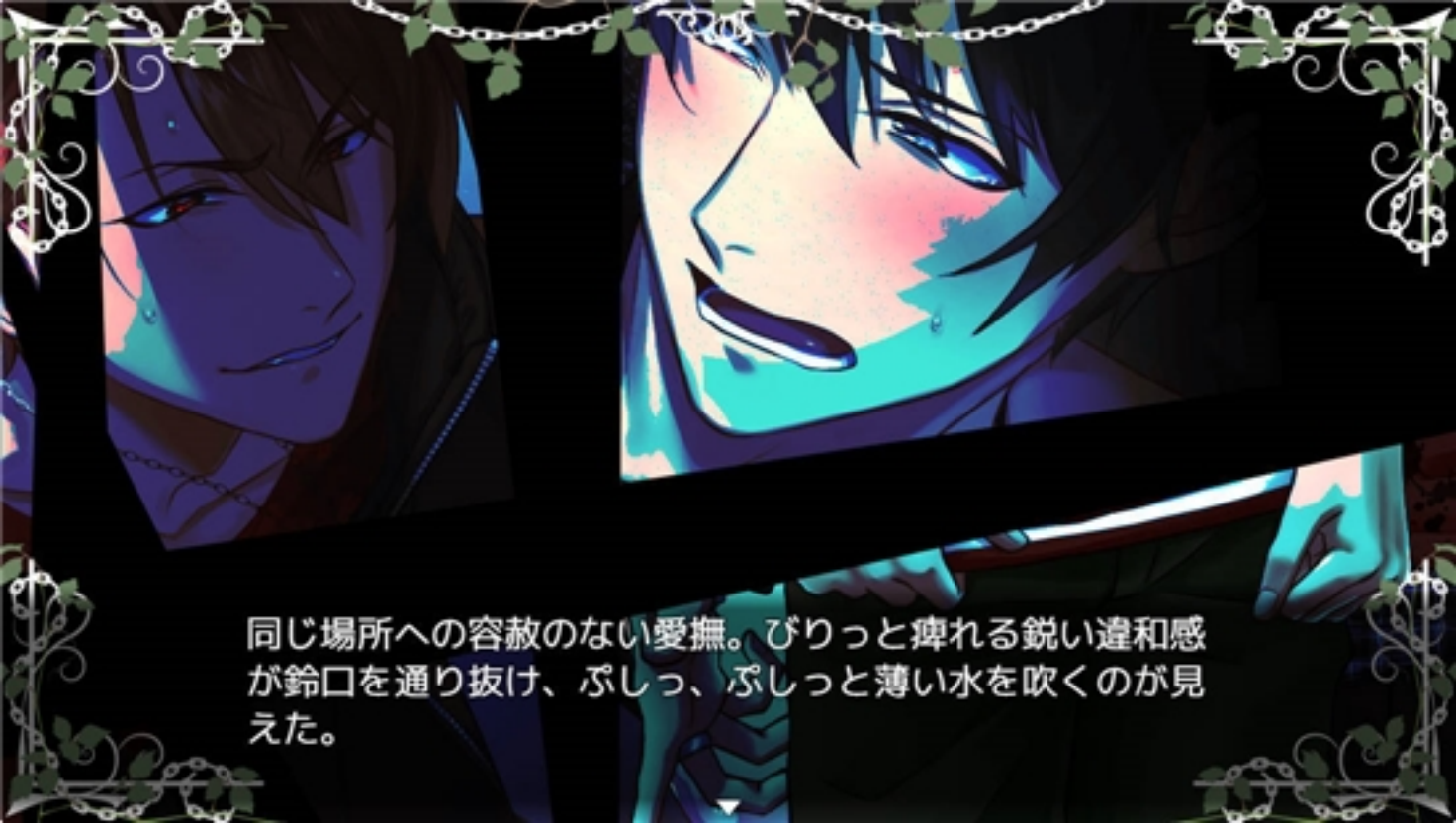
[宮澄マシロ]

「あ……あ……！ つ、ひ……う……っ！」





面白いオモチャを手に入れた子供のように、サンゴの指が俺の先端を追い立てる。



同じ場所への容赦のない愛撫。びりっと痺れる鋭い違和感が鈴口を通り抜け、ぷしっ、ぷしっ、と薄い水を吹くのが見えた。




[宮澄マシロ]

「う、あ、〜〜つ……や……」



[宮澄マシロ]

(やだ、なんだこれ……わからない)



湧き上がるのは羞恥と混乱、違和感と恐怖と……期待。



【宮澄マシロ】

(おれ、へんなことになってる……こわい、けど……なん
かこれ……)




[黄橡サンゴ]
「えっろい感じだろ？」



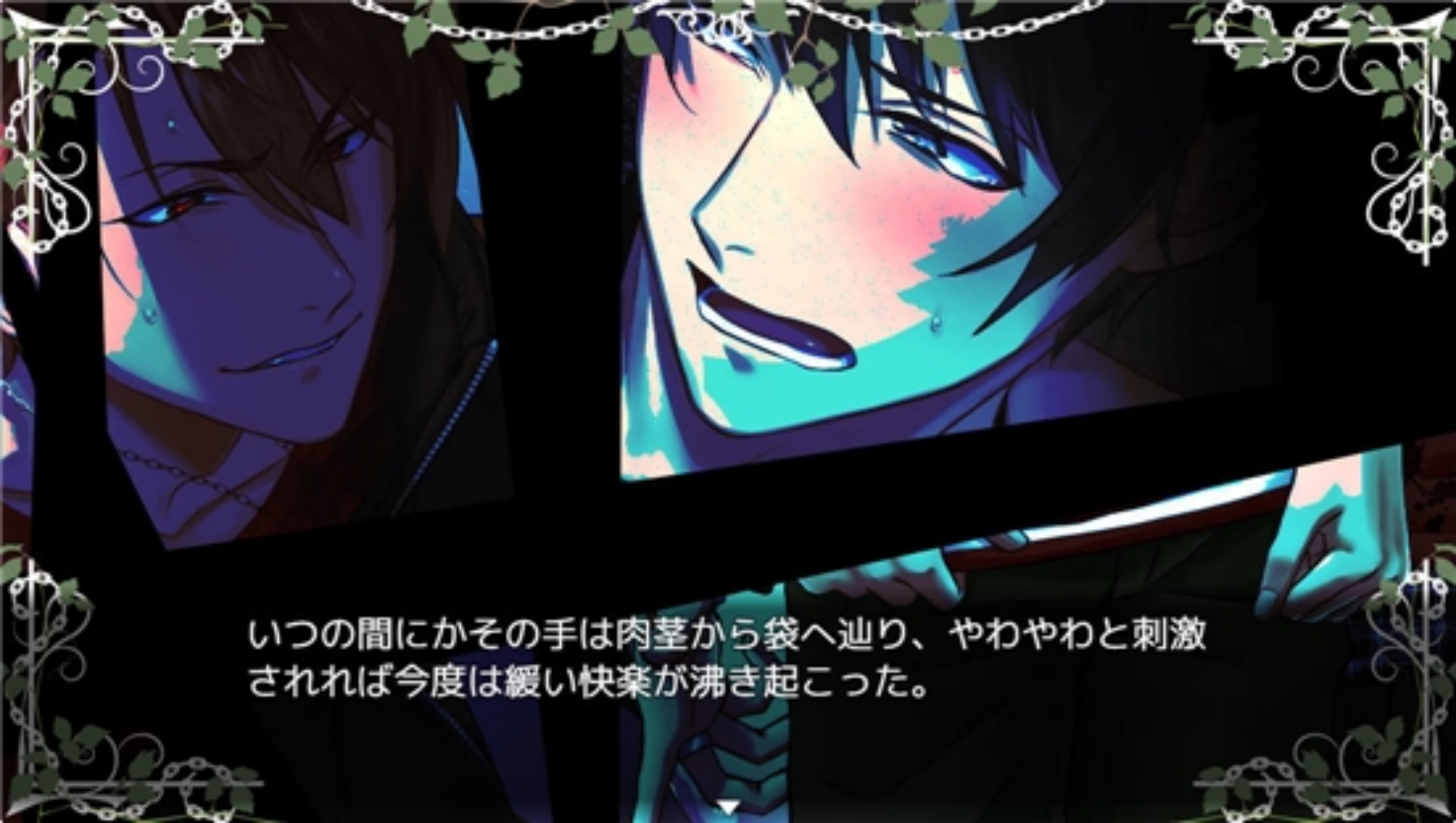


[宮澄マシロ]
「!!!」





はふはふと荒い息を吐きながら快感を拾い上げる俺を、サ
ンゴが間近で覗き込んでくる。



いつの間にかその手は肉茎から袋へ辿り、やわやわと刺激されれば今度は緩い快樂が沸き起こった。



[宮澄マシロ]
「っは……ア」



【黄橡サンゴ】


「オレもコーフンしてる。間近で見て触んのもって……やっぱスゲー」





[宮澄マシロ]
「う……」

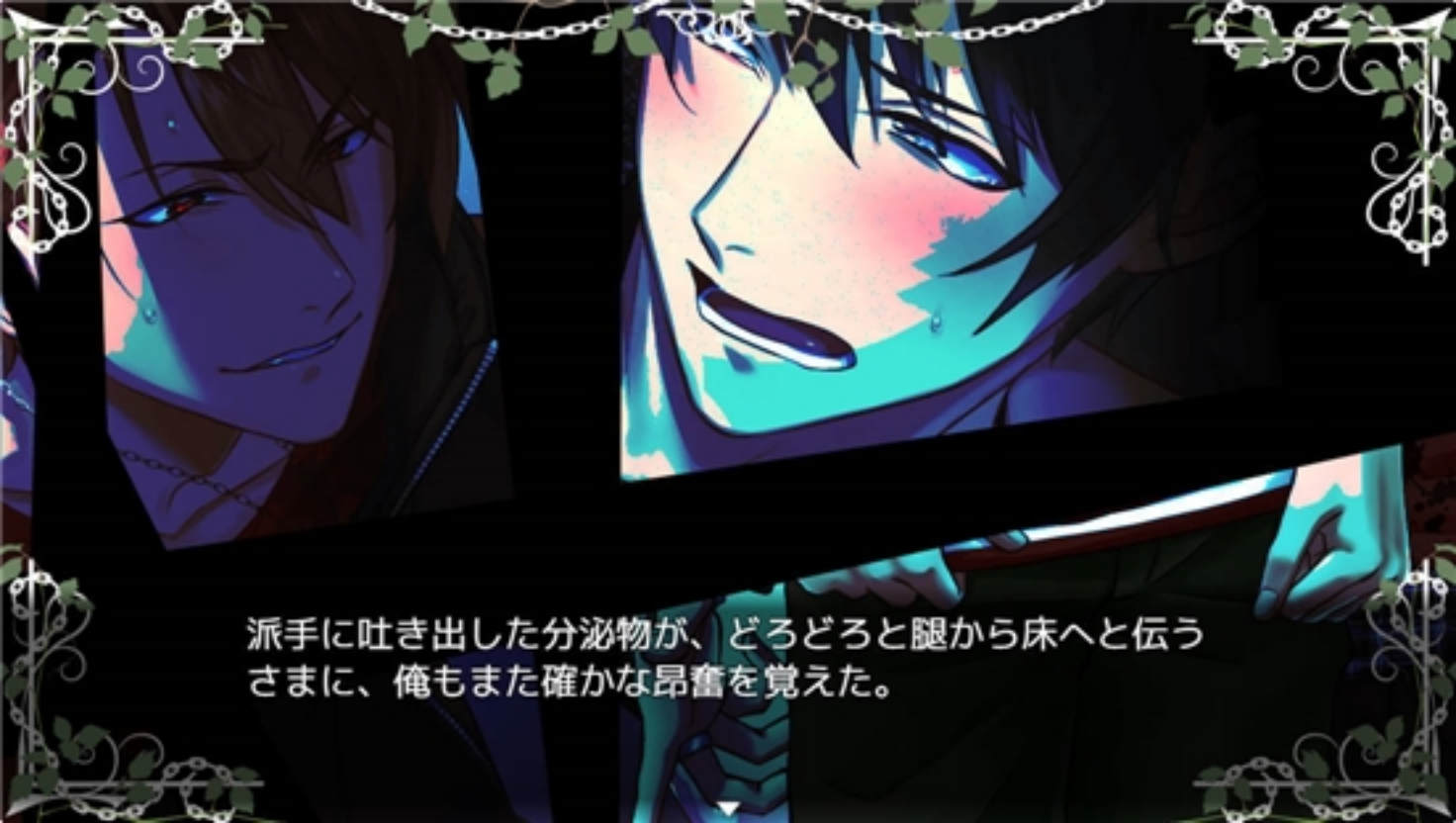




熱っぽく語るサンゴに絆されるように、恐怖と羞恥が緩ま
っていく。

The image features two anime-style characters in a dark, atmospheric setting. The character on the left has dark hair and a serious expression, while the character on the right has light-colored hair and a wide, toothy grin. They are both wearing dark clothing. The scene is framed by a decorative border of green vines and leaves. The lighting is dramatic, with strong highlights and deep shadows.

俺にとっては初めての『すごいコト』。

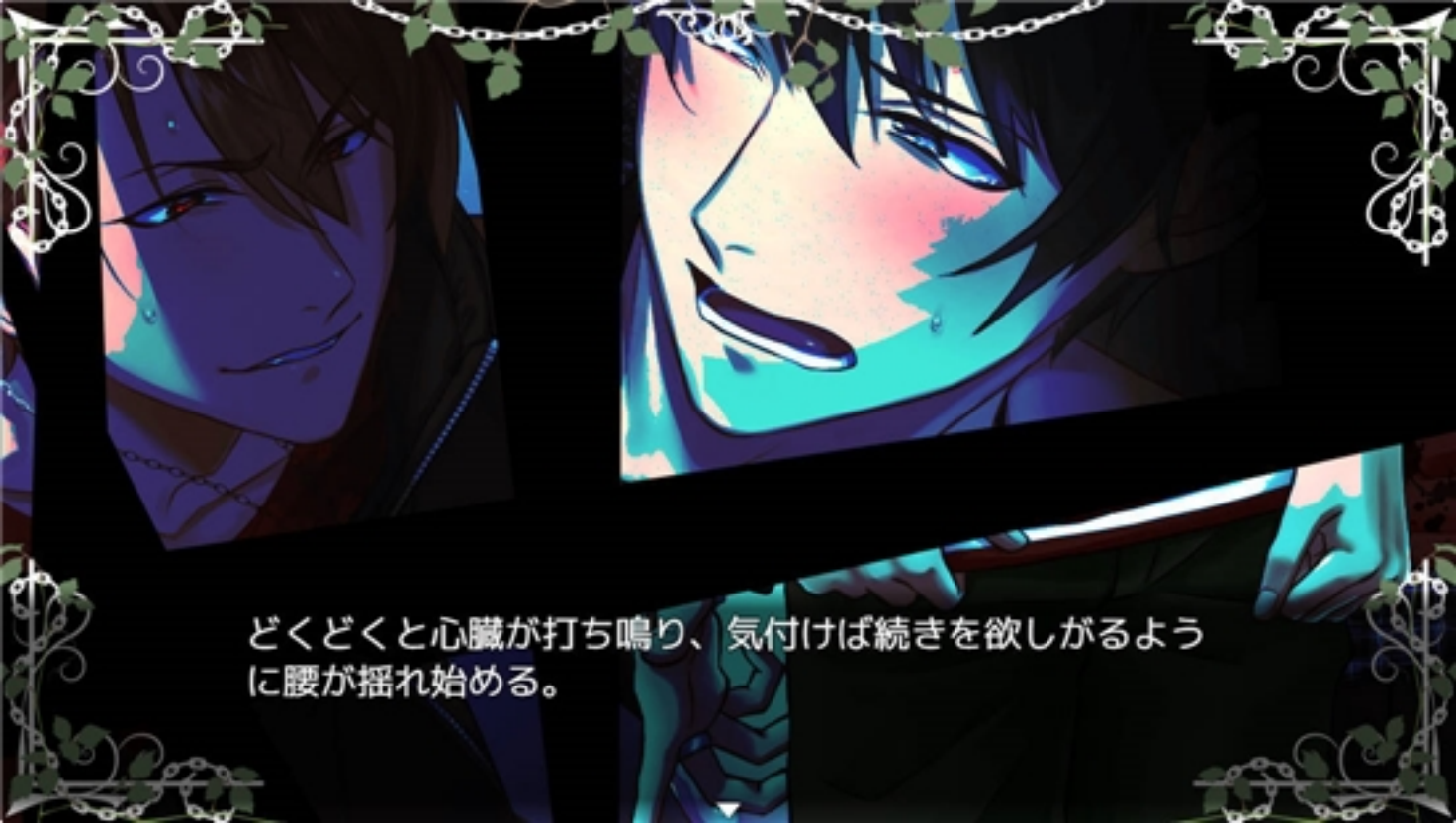


派手に吐き出した分泌物が、どろどろと腿から床へと伝う
さまに、俺もまた確かな昂奮を覚えた。




[宮澄マシロ]
(すごい……)






どくどくと心臓が打ち鳴り、気付けば続きを欲しがるように腰が揺れ始める。



だめだ、こんなの、はずかしい。



そう思うのに、刺激に慣れたアタマも身体も快楽を欲しがって止まらない。




[宮澄マシロ]
「や……サンゴ、らめ……」



[黄橡サンゴ]
「……！」







頼りない建前を零し、縦る様な視線がサンゴとかち合った、瞬間。



[宮澄マシロ]
「っ、ソ……！」



ぐっと余裕なく呻いたサンゴに、だらしなく唾液を伝わせる唇を塞がれる。




噛みつくような、初めての口付け。確かな快樂に、視界が
くらくらと眩んで……。




[宮澄マシロ]

「ん、っ……！！　っ、ふあ、あ……あ！！」



どくと血流が下肢に集まったのと殆ど同時。



ぎゅうっとサンゴに身体を押し付けながら、震える屹立から再びナニカをびゅくりと吐き出していた。



ファイリアに集う
羊たちの

唄



[東雲アオイ]

「あの、マシロくんってお酒弱かったですよね？」





[鵜野トオル]

「そう記憶してる」





[塙田モモ]

「おーいマシロ、大丈夫か？」





[宮澄マシロ]

「っ……だいじょばない」





[黄橡サンゴ]

「……」





ヤケクソで流し込んだカクテルが手酷い酔酩を誘う。





甘めの口当たりとはいえ、一気に飲み干せばどうなるかは
明白だった、けれど。





[黄橡サンゴ]

「だいじょばないって、なんだその日本語」





【宮澄マシロ】

「う……つーじるからいーだろ」





[黄橡サンゴ]

「うっわ、ひで一呂律」





【宮澄マシロ】

「……わ……か……つて……る」





ごめん、迷惑かけて。でも、飲みたい気分なんだ。





そんな言葉を口にするより早く、サンゴがぶすっとした顔で立ち上がった。





[黄橡サンゴ]

「ちょっとマシロ借りるぜ」





[宮澄マシロ]

「え」



言うと同時に、返事も待たずにサンゴが俺をぐいぐいと引き摺って行く。





強引に連れ込まれた化粧室。はああと大きな嘆息を零した
サンゴが、ずいっと俺に詰め寄って告げた。





【黄橡サンゴ】

「な、マシロはこないだのこと怒ってるのか」





[宮澄マシロ]
「!」





【黄橡サンゴ】

「なんだその顔、違ったのかよ」





【宮澄マシロ】

「ち、がう……俺は、自分に怒ってるんだ」



[黄橡サンゴ]
「へ？」





【宮澄マシロ】

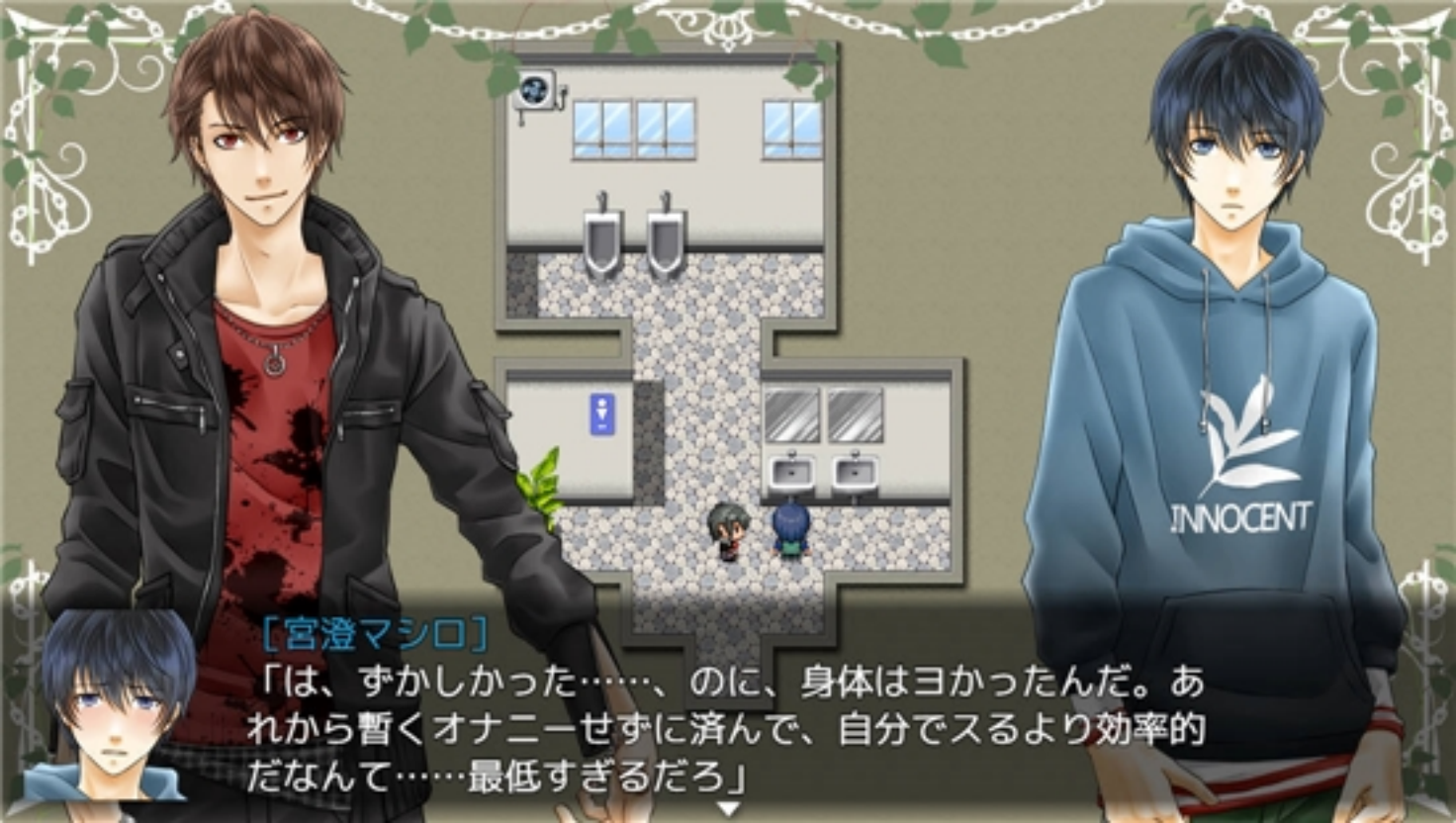
(サンゴにじゃない。あのことが嫌じゃなかった……自分に怒ってる)



羞恥と困惑、自責に塗れた顔面を隠すように顔を背ける。



ふわふわとした酩酊に背中を押されながら、俺はここ数日溜め込んだ感情を吐露し続けた。



【宮澄マシロ】

「は、ずかしかった……、のに、身体はヨかったんだ。あれから暫くオナニーせずに済んで、自分でスるより効率的だなんて……最低すぎるだろ」



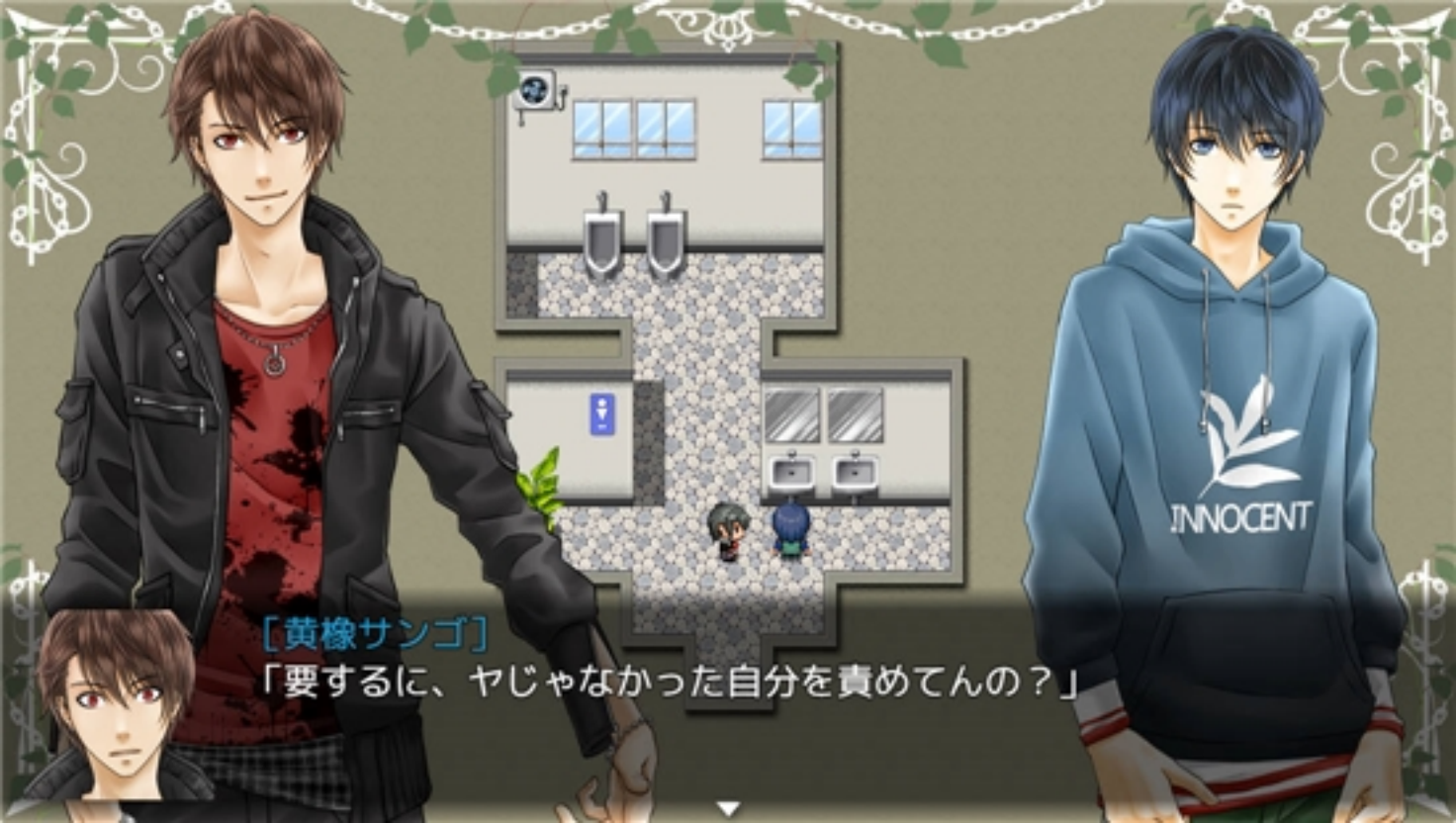
とうとうぐずぐずとしゃくりあげてしまい、持ち上げた手のひらで鼻を擦る。





呆けたように立ち尽くしていたサンゴだが、ややあって俺の両頬をぐっと掴んで強引に正面を向かせた。





【黄橡サンゴ】

「要するに、ヤじゃなかった自分を責めてんの？」



[宮澄マシロ]
「っ……」





【黄橡サンゴ】

「あー……わかったマシロ、それはオレがワリかった」



【宮澄マシロ】
「え？」



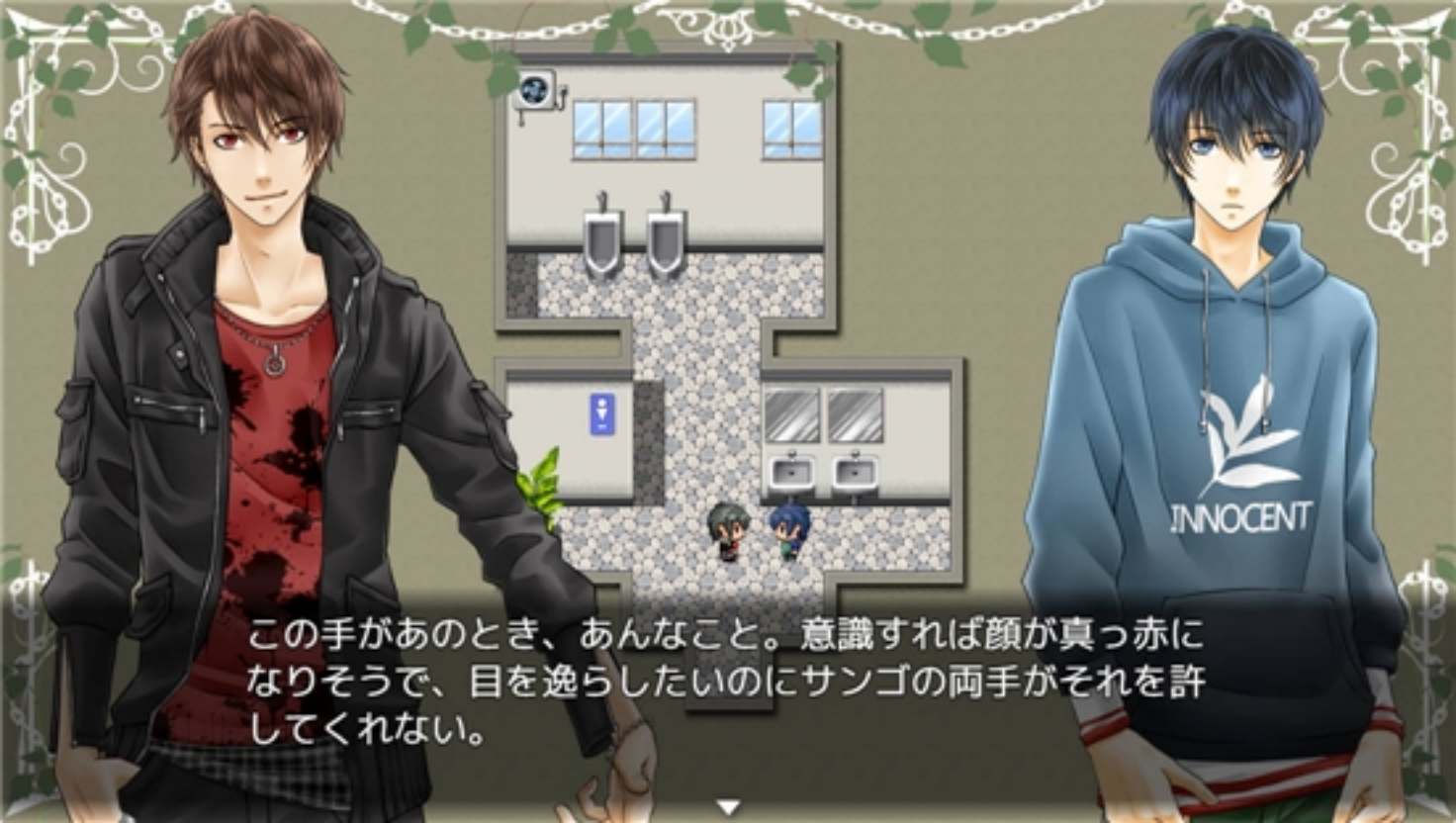


【黄橡サンゴ】
「ゴメンな」





ぐにぐにと俺の頬をふざけて押し潰しながらも、眉を下げるサンゴのちぐはぐな仕草。



この手があのととき、あんなこと。意識すれば顔が真っ赤になりそうで、目を逸らしたいのにサンゴの両手がそれを許してくれない。





【宮澄マシロ】

「なんで、サンゴが謝るんだ」



【黄橡サンゴ】

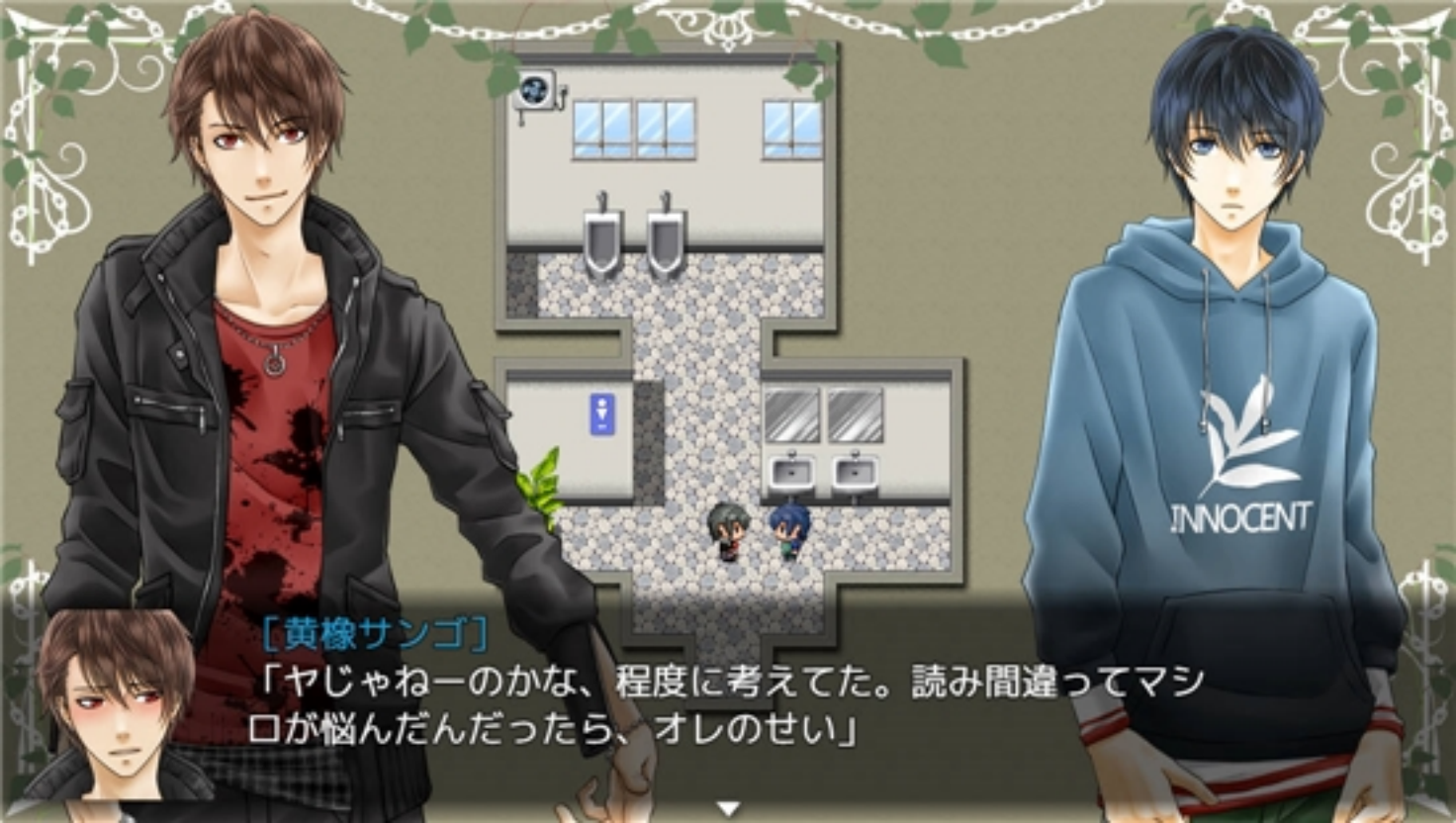
「あー……ずるずるヤっちゃったから」





【宮澄マシロ】
「え」





【黄橡サンゴ】

「ヤじゃねーのかな、程度に考えてた。読み間違っマシ
口が悩んだんだったら、オレのせい」



【宮澄マシロ】
「そ……そんなこと」





【黄橡サンゴ】

「あとな、マシロ。もいっこ謝る」





[宮澄マシロ]
「？」





【黄橡サンゴ】

「ちょっと欲情してきた」





[宮澄マシロ]
「え!？」

INNOCENT



【黄橡サンゴ】

「ワリ、涙にもグッとときちまう」





【宮澄マシロ】

「……分泌物、だから？」





【黄橡サンゴ】
「そー。そゆコト」





涙を零しながら呆ける俺に、サングが仕切り直すようにはあっと息を吐いて向き直る。



【黄橡サンゴ】

「な。オレはマシロのことなんか考えねーで欲情するバカなんだよ」



[宮澄マシロ]
「っ……」





【黄橡サンゴ】

「だからマシロも、泣くよかこー……もっと割り切らねえ？」



[宮澄マシロ]
「え」



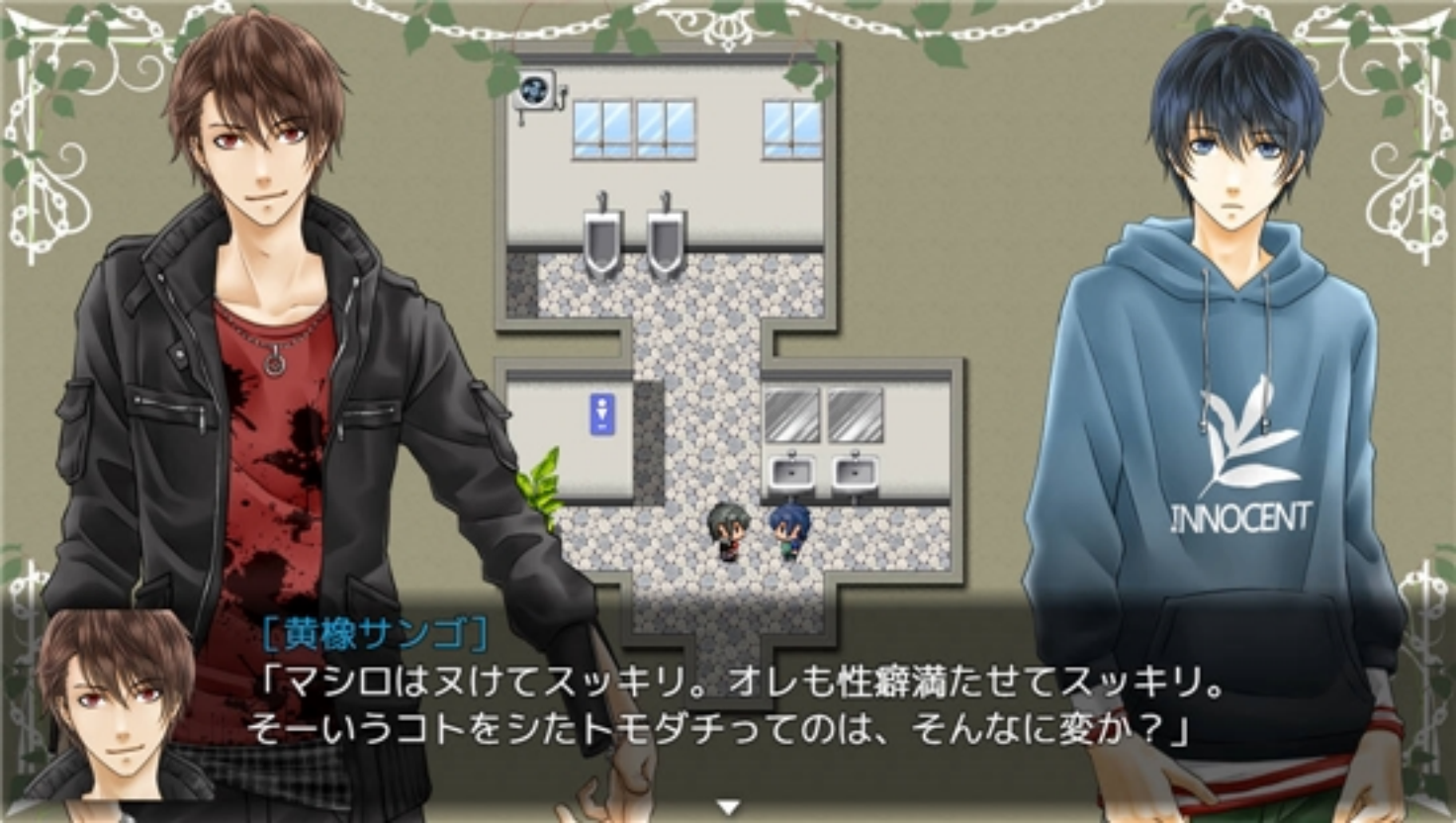


サンゴが表情を一転、にっこりと快哉な笑みをを見せて俺にぐっと詰め寄った。



【宮澄マシロ】
「わ!？」

INNOCENT



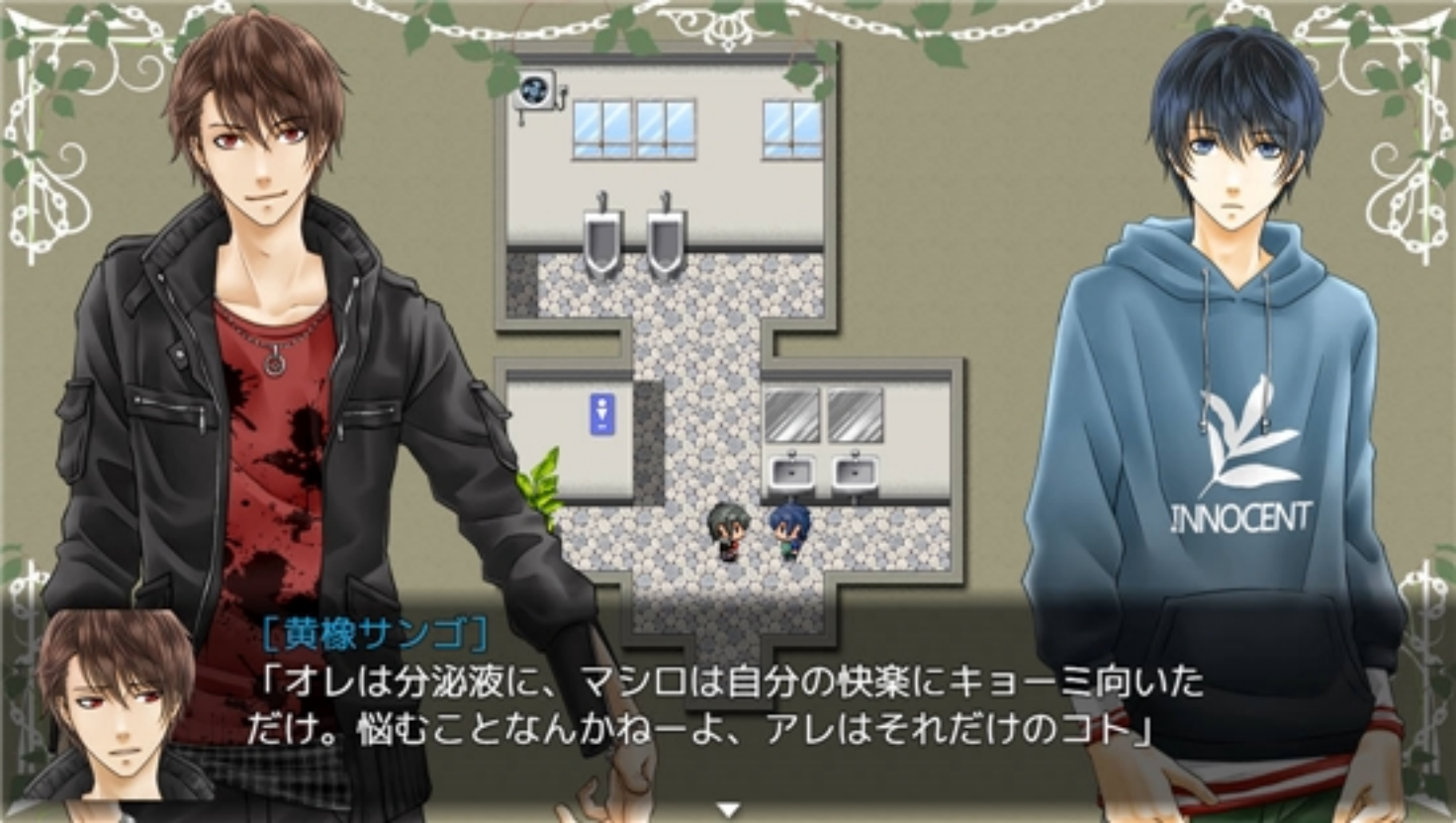
【黄橡サンゴ】

「マシロは又けてスッキリ。オレも性癖満たせてスッキリ。
そーいうコトをシたトモダチってのは、そんなに变か？」



[宮澄マシロ]
「!!」





【黄橡サンゴ】

「オレは分泌液に、マシロは自分の快樂にキョーミ向いた
だけ。悩むことなんかねーよ、アレはそれだけのコト」



[宮澄マシロ]
「……」





ともすれば、冷たくも聞こえるサンゴの台詞。



けれど、その言葉がわかりすぎるぐらいわかる。あのとき、俺はサンゴのことを考えていなかった。ただただ自分の快樂のことだけ。



【宮澄マシロ】

「そ、そんな風に……軽く終わらせていいのかな」



【黄橡サンゴ】

「気に病んで泣くよかいいだろ」





【宮澄マシロ】
「え」





【黄橡サンゴ】

「マシロの涙はスゲーいい感じ。けど、トモダチの涙はやな感じ」



【宮澄マシロ】
「……トモダチ」

INNOCENT



【黄橡サンゴ】
「そー」





【宮澄マシロ】
「っわ！」

INNOCENT



熱っぽい話題から一転、サンゴにぐしゃぐしゃと気安く涙を拭われて驚いてしまう。



そんなに驚くなよとケタケタと笑ったサンゴが、軽い調子で続きを告げた。





【黄橡サンゴ】

「話は終わり。戻るぜ、アオイさんたちが心配する」





【宮澄マシロ】

「……う、ん。サンゴ、その……ありがとう……」



【黄橡サンゴ】

「へ？ なんで？」





【宮澄マシロ】
「……な、んとなく」





何に対してなのか、わからないまま曖昧に礼を告げる。



慰めてくれて。気遣ってくれて。俺の劣情を理解してくれ
て。





どのありがとうかはわからない。けれど、どの感情も俺の
内に存在した。



[黄橡サンゴ]
「……」





暫く妙に顔を赤くしていたサンゴだが、次の瞬間。



ドンと俺を壁際に押し付けたあと、顔をぐっと近づけて告げた。



【黄橡サンゴ】

「そーんなニコニコされるようなお綺麗なコト、してねーけど」



【宮澄マシロ】
「え」





【黄橡サンゴ】

「気が向いたらまたしようぜって、オレは思ってるぜ」



[宮澄マシロ]
「え!？」





ぱっと身体を離して笑い上げたサンゴが、ドアノブに手をかける。





【黄橡サンゴ】

「じゃ、お先に。涙まだ出てっから拭いてから来いよ」



【宮澄マシロ】
「あ」





ボタンと外へ出たサンゴを呆気にとられながら見送り、は
っとして鏡を見る。





[宮澄マシロ]

(う、わ、ほんとだ酷い顔！！)



それでも。再びのあんな誘いをかけられながら、ついぞ怒りや嫌悪が沸かない自分に再び驚いていた。





[宮澄マシロ]
(.....)





悪意がなければ何でも許されるものでもない。



それでも、あまりにもそれが感じられなさすぎる時は……
どう考えればいいんだろう。





[宮澄マシロ]

(……わ、わからない……後で考えよう)





とにかく今は先送りに、と息を吐く。





家に帰って、考えて……それでもわからなければ、また誘われた時に決めればいい、かも知れない。





[埴田モモ]

「マシロ? なんかあったか?」





[宮澄マシロ]
「!!!」





モモにコツコツと扉をノックされ、跳ね上がるように振り返る。





思案を打ち切ってすうはあと深呼吸した俺は、大丈夫だと声を上げ、慌ててドアノブに手をかけた。





ファイリアに集う
羊たちの

唄